
機動戦士ガンダムBeast 流星のアムラス

鉄屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムBeast 流星のアムラス

【Nコード】

N6580S

【作者名】

鉄屋

【あらすじ】

宇宙世紀0108

舞台はマフティー・ナビユ・エリンこと、ハサウェイ・ノアが起こしたマフティー事件から3年後の物語……

地球圏で幾度と無く起こった戦争や紛争はほとんど無くなり、戦争を知らない『ノーウォーベイベーズ』と呼ばれる世代の子供達ができるほど一見安定した世界。

そんな時代にシアトル近郊の沿岸都市に住む少年、アムラス・チエカ・イルマは、自分の本当の父親を知らないまま育った。母と2人

暮らしのアムラスは、父のことを母親に聞くが、母親にいつも誤魔化されてしまう。それに行動的な母は家を開けることが多く、アムラスは近所に住む幼なじみの家にお世話になっていた。

そんなある日、母親が数ヶ月ぶり帰ってくると言う知らせを受け、アムラスは母親を空港に迎えに行くことにした。だがそこへ、正体不明のMSは墜落、空港内は大パニックになる。そこに正体不明機とその両機を捕獲する為軍が介入、正体不明のMSは介入してきた軍のMSに発砲、事態は局地戦の様相を呈した。空港内に沸き上がる阿鼻叫喚の中、母親を捜すアムラスは、偶然墜落して動かなくなつた1機のMSと運命的な出会いをする。

それは皮肉にも、かつて少年の本当の父親が受け入れざる終えなかつた過酷な運命に酷似していた……

そのマシンの名はRXF-108コードネーム『ビースト』。

相応しい乗り手を迎え入れ、その頭部に配された独特のデュアルカメラが仄かに輝くとき、マシンに眠る1匹の猛獣が目覚ます……
宇宙世紀のサーガを繋ぐミッシングリンク。その血に刻まれた抗えない運命を背負つた少年が星々を駆け抜ける流星になる。

主な登場人物など

《登場人物》

アムラス・チエカ・イルマ（主人公）

癖と強い髪と澄んだ瞳を持つ16歳の少年。母親の実家の特権で地球に住み、地元のハイスクールに通っている。自分の本当の父親を知りたいという気持ちがあるが、母親を気遣い強く追求しないで居る。性格は穏和だが、自分の考えをハッキリ言う意志の強さと頑固な一面もある。空港に母を迎えに行った際に、コントロールを失ったBeastの墜落で不運にも戦闘に巻き込まれてしまう。

ミル・ジヨスター・アカギ

アムラスと同じハイスクールに通う女の子。父親が元特殊部隊隊員で過去に起こった紛争で勲章を得たことと、古い友人であるアムラスの母親の働きかけで地球に住む権利を得て、10年前からイルマ家の近くに住んでいる。アムラスの母親が長期で外出の際は、アムラスは彼女の家に預けられており、アムラスとは幼なじみの関係。綺麗なブロードヘアーの女の子で、幼い頃から一緒に育ったアムラスを何かと気に掛ける。空港に母親を出迎えるアムラスにつき合い、アムラスと一緒に戦闘に巻き込まれてしまう。

ベルトーチカ・チエカ・イルマ

アムラスの母親で現在42歳。若い頃は養父の支援していた反地球連邦政府組織『カラバ』にも所属し、数度の大規模な紛争中も各地を飛び回っていた。現在でもその頃の仲間や知人と繋がりがあり、世界各地の事件などを取材しているフリーランスのジャーナリスト。若い頃から非常に行動的な女性で、40を過ぎても尚その行動力に衰えが無く、そのせいで実年齢より若く見られることが多い。過去

に2度結婚するがいずれも離縁・死別しており、現在はシングルマザーで息子のアムラスと2人で暮らしている。ある人物から3年前に起こった『マフティー事件』の真相調査を頼まれ、その真相を知る人物に会う為、日本の九州に行っていたが、北米に戻ってきたときに空港でアムラス等と共に戦闘に巻き込まれる。因みにミドルネームの『チエカ』は彼女の2番目の夫のミドルネームで、夫が事故で亡くなった際に付けたもの。気さくで気が強いが、そう言ったセシメンタルな面もある。

アルガット・ベクター

新興の複合企業ブッホ・コンツェルンの運営する非合法極秘私設武装組織に所属するMSパイロット。現在の連邦政府に『揺さぶり』を掛ける為、地球での反地球連邦政府活動を行う実行部隊の一人。地球での作戦で使用する為、裏ルートで送られてきた新型MS『ビースト』を受領し操縦するが、システムの暴走でアムラス達の居る空港に墜落させてしまう。自信家で煽てに乗りやすい性格の持ち主で、周囲の仲間から『ニュータイプ』と呼ばれ、その事に自分でもそう思いこんでいる。過去に起こった紛争『シャアの反乱』時には地球連邦軍のMSパイロットとしてアクシズ戦に参加した経験もあり、下に挙げるバイヤとはその頃からの付き合いである。

バイヤ・オズマリ

上に挙げるアルガットと同じ組織に所属するMSパイロットでアルガットとは親友の間柄。アルガットと違い冷静で状況判断能力に優れる指揮官タイプ。二児の父親だが、現在は妻と別れ独り身になっている。『ビースト』を受領するアルガットに同行するが、アルガットの乗る『ビースト』が墜落した為、アルガット救出のため空港に降りるが、連邦側の妨害に合いやむなく応戦する。

マフティー・ナビユ・エリン

三年前にオーストラリアにある連邦議会に攻撃を仕掛けた非合法武装組織『マフティー』のリーダー。自身も極秘裏に入手したアナハイム社製最新鋭機、RX-105コードネーム『三（クスイー）』というガンダムタイプのMSを駆り戦うも敗北。その後連邦側に捉えられ銃殺された。上に挙げた名は、世間を欺く仮の名前で本名はハサウェイ・ノアと言い、『シャアの反乱』で活躍したロンドベル隊の司令官ブライト・ノア大佐の息子である。

セイラ・マス

一年戦争時の伝説部隊、元ホワイトベースのクルー。戦後すぐに軍を除隊、各金融機関に凍結していた養父テアポロ・マスの莫大な遺産の全てを相続し、その遺産を元に環境保全と文化財を補完するティアポロ財団を設立してその会長を勤める女性。その傍ら医療分野や教育分野にも力を入れ、病院経営、学校経営、更には薬剤メーカーなども創設する敏腕な実業家でもある。また、独自で創設した私設諜報集団『ルシファ』を使い様々な情報を入手する情報通でもある。年齢は46歳で現在までに公になっている結婚歴は無いが養子に迎えた娘がおり、16歳ながら飛び級で大学に通っている。現在は西海岸の豪邸に娘2人と数人の使用人と一緒に住んでいる。

シャルンホルスト・ブツホ

ブツホ・コンツェルンの創設者。ジャンクヤから1代で会社を大企業に育て上げた異能の経営者。その財力でUC0068年に旧欧州の名家『ロナ家』の名を買い取ってシャルンホルスト・ロナと改名。財界や政界に発言力を持つようになり、彼のサクセスストーリーは彼の死後映画にまでなった。その後彼の子や孫が政界に進出し、事業と共にその力をより大きな物にしていく。この物語の年代から15年後の未来、彼の子孫達は地球圏にある大きな事件を引き起こすことになるのだが……

ハウゼリー・ロナ

ブッホ・コンツェルンの現社長。アルガットやバイヤ達が所属する組織のトップでもある人物。フランクな性格の気さくな好青年と言った感じ。大手スーパールの経営主の娘と電撃結婚し、サイド1のコロニー『ロンデニオン』で盛大な式を挙げ、その様子をTV中継するというパフォーマンスを見せる。派手好きで新しいこと好きな人物で、一見軽そうに見えるが、実は正義感や使命感が強く青臭い一面もある。ただ、その考え方や大胆な行動から彼を支持する部下や知り合いも多いが、同時に敵も多く作ってしまう。過去に上に挙げたセイラと会い、彼女の考えに賛同して地球環境の保全に興味を持ち、現在の連邦政府の政策に不満を持つようになった。

《登場MS紹介》

RXF-108BD 開発コード『Beast』

官民複合公社『海軍戦略研究所（Strategic Naval

Research Institute）』通称サナリイ（S.

N.R.I.）の開発した新型MS。財政の硬直化が問題になり軍縮が叫ばれる連邦政府の一部の議員、軍幹部から挙げた『MSの小型化と機構統一化による整備と支援の簡略化』というテーゼの提示を受け、サナリイが極秘で進めている『小型MS開発計画』の新企画で生み出された第二MS開発期のプロトタイプの機体。新媒体の加圧タービンユニット『ニュートリノタービン』と超高速ロータリングモーターを実装することにより、従来のミノフスキー型熱核反応炉を大幅に小型化しても推力、火力を維持したままMSの大きさを15mまで小型化することに成功した機体である。機体が小型化したことで機動性、運動性が大幅に向上し極めて高性能なMSになった。また、実戦テストも兼ねる実験機の意味合いも強く、先に挙げた新型エンジンに加え、ほぼ全ての動作をパイロットのイメー

ジで動かす『ブレイン・インターフェイス』やその稼働を前提に設計された機体管制オペレーティングシステム『ビーストドライブ』、更にはそれらを扱う搭乗者の補佐として思考学習型戦略戦術AI『ウィップ』など、採算を度外視した様々な新機構、最先端技術がふんだんに盛り込まれている。ただし『ブレイン・インターフェイス』『ビーストドライブ』『ウィップ』の調整が搭乗者の精神に寄るところが多く、出力や作動状態が非常に不安定な機体になっている。因みにサナリイの開発機体でありながら型式番号に『RX』が付くのは、機体の外観がガンダムタイプに酷似していることと、機体の開発者達がアナハイムからの移籍者達であり、また使用目的が非法活動であるので入手ルートを攪乱する為であるが、移籍者達の元居た会社への『当てつけ』という意味合いも含んでいる。ニユートリノタービン稼働時には、両肩の後ろに配されたデバイスからフィンが飛び出しタービン内の圧力を逃がして調整するが、この肩のフィンの意匠は後にサナリイが開発する『フォーミラーシリーズ』に受け継がれることになる。形式番号のFはそう言った意味。

Me02R『メツサー』

先の紛争『シャアの反乱』の際、ネオ・ジオン側の主力MS『ギラドーガ』の流れを汲む第2世代型のMS。元を辿れば旧大戦のジオン公国軍で量産された第1世代型MSである『ザク』の意匠を引き継いだ汎用MSで、3年前の『マフティー事件』でマフティー側が使用したのが最初の実戦投入である。MS開発最手メーカーであるアナハイムエレクトロニクス社製のMSだが、アナハイム社のライバルであるサナリイ（S・N・R・I）から盗み出した情報を元に開発したというスキャンダラスな噂がある曰く付きの機体でもある。汎用性に富み複数の火器オプションを備え、また内蔵火器も備え持つ。高出力のジェネレーターとその恩恵に預かった強力なスラスタによって重力下でも高い運動性を示すハイスpekクな機体だが、その分コストが高く生産数は十数機となっている。

FD-03 グスタフ・カール

アナハイム社製の汎用量産型MS。第2世代型の名機と言われたRGM-89 ジェガンを再設計した機体で、連邦の地上部隊の主力MS。装備は凡庸だが、この時代チタン合金セラミックの製造技術が向上し一年戦争時代のルナ・チタニウム合金（ガンダリウムα）に匹敵する強度と、大型ジェネレーターによる高出力で高い運動性と装甲防御力を合わせ持つ高性能なMSである。ビームライフル、ビームサーベルはジェガンの物をそのまま使用している。

XCB-008 『デッサ・デナン』

航空機メーカー、ブッホ・エアロダイナミクス社が独自開発した同社初の空間作業用MS『デッサ』を元に極秘で戦闘用に再設計した第二MS開発期の前身にあたる機体。ただ独自開発と言ってもアナハイム社やサナリイ社から非合法で入手したノウハウを元に行っている。大型化傾向にあった大手メーカーのMS開発の中で全高13mという小型MSを開発したのは開発者の先見の明があったと言える機体。特徴はジェネレーターを外付けにして出力を機体各所に分散させることで高出力を確保するという手法が取られている。また、頭部のフェイスマスクが独特でメインカメラにゴーグルセンサーを採用しており、そのことから搭乗者達からは『丸眼鏡』という愛称で呼ばれている。武装も変わっていてショットランサーという槍のような武器を装備し、高出力の射撃ビーム兵器を持たない。これは開発者の『戦場を拡大させない』と言う意図から誘爆の危険がある射撃ビーム兵器を廃した為である。また小型化の利点でジェネレーター出力に余裕が出来たことから新兵装『ビームシールド』を初めて実装したMSでもある。

プロローグ

ああ、獣が駆けていくわ

あなたと私の愛の証

あなたの血が、あの獣には流れているの

あなたの純粋な魂が、あの獣には宿っているの

それは、運命を変える力

それは、人の可能性

だから安心して

あなたが溶けたこの宇宙に

あなたが宿した希望が

あなたの残した軌跡の種が

青い流星となつて流れるから

ねえ？

私はあなたとの約束を果たしたかしら

そう……

なら私も、やっとあなたの所にいける

あなたが溶けた

あの優しい星の海へ

光り輝く獣の背に背負われながら……

ああ…… 私にも見えるわ

あなたが見た時の色が

(1)

「——であるわけだ。つまり月の周回軌道を回ることによって地球到達までの時間や推進燃料を押さえることが出来る。惑星の自転引力を利用した航行、これがスウィング・バイ航行の一般的な概念だ。さて、では航宙艇がラグジュアル3から地球までの到達時間を、各自で計算するでしょう。おいおい、そんな顔するな。公式に当てはめれば誰でも出来る計算だぞ？ 誰か代表で前に出てきて貰って計算して貰うことにしようか。さて……」

アムラス、前に出て計算し…… おいアムラス、アムラス・チェカ・イルマ！」

机に備え付けられたタッチパネルキーボードの上に体を預け、心地よい睡眠を続けていたアムラスは、背中をつつかれる感覚でぼんやりとした覚醒を味わっていた。

(アム、呼ばれてるよ！)

背中からそんな女の子の声が掛かり、続いて中年の男の自分が自分の名前を呼んでいた。まだ夢と現実との区別の付かない脳が、その声に反応してようやく目を覚ました。

「は、はい！」

思わず立ち上がり直立不動のまま周囲を見回すと、教室の生徒の目が全て自分を見つめていることに気付き唖然とした。そしてわき起こる笑いの中、アムラスは曇天とした気持ちで正面を見た。

(またやつちまった……)

そう心の中で毒づきつつ、教壇に立つ教師を見て舌打ちしたい気分を押し殺した。

「先週に引き続き今日もかアム。そんなに私の話は子守歌に聞こえるのかね？ 自分ではそれほど良い声とは思わないのだがな」

正面に立つマイクス・フェンペラー教諭が眼鏡を反射させつつ、そうジョークじみた皮肉を言うと、周囲の笑いが1オクターブ上が

ったように感じられた。

「アム、君のこの教科の試験成績は決して悪くない。だが私はね、話を聞く気の無い者にプラスの評価を与えるほどお人好しでもない。評価試験の点数だけが成績の判断基準だと思っているのならそれは間違いだ。集団生活の適応と良好な対人関係を築くことも、学校で学ぶべき大切な勉強だと私は思うが、君はどう思うね？」

決して大きな声を上げて叱りつける事はしないのがマイクス教諭の特徴だった。そのせいか生徒達からの人気も高い。現にアムラスもマイクスが嫌いではなかった。しかしこの『緩やかな諭し』はどうしても好きになれなかった。まだ頭ごなしに怒鳴られた方がマシだとも思う。マイクスのお説教はなにかこう、自分がとても悪いことをしたような気持ちになってしまうのだ。

「はい、自分もそう思います。スミマセンでした……」

アムラスはそう言って頭を下げた。

「ふむ、まあよろしい。すぐに自分の非を認めることも大事な勉強の一つだ」

マイクスはそこで一端言葉を切りため息をついた。

「だが、これで二度目だ。非を認めることと共に、君は反省することを学び賜え。次は無いぞ、アムラス」

マイクスがそう言った瞬間、授業終了を告げるチャイムが鳴った。「はい、今日はここまで。計算は宿題とする。データは明日の昼までにMドライブの私のボックスに入れておくこと」

マイクスがそう言って教室を出ていくと、生徒達が各自持ち物を鞆に詰め帰り支度始めた。それにより教室内が一気に騒がしくなった。アムラスはため息をつきながらくせっ毛の頭を掻きつつ机の横にあるリュックを手を取った。すると背後から先ほどの女の子の声が掛かった。

「全く、アムったらせっかく私が起こしてるのに全然起きないんだもの。その寝起きの悪さはなんなの？ 一昔前なら殺されちゃってるわよ？」

振り向くと目の醒めるようなブロンドの髪をした女の子が、右手を拳銃に見立てて「ばん！」と言いながら笑っていた。そうやって笑うと右頬にえくぼが出来るのはジュニアスクール時代から変わらない。

彼女の名前はミル・ジヨスター・アカギ。アムラスとは幼なじみである。アムラスの母親とミルの父親が古くからの友人で、彼女の父親が転職したのをキッカに家族でアムラスの近くに引っ越してきたのが丁度10年前だった。

アムラスの母親は行動的な女性だった。若い頃はカラバという反地球連邦政府運動にも参加し、アムラス達が授業で習う歴史上の事件、ティターンズ紛争やグリプス戦役、第一次及び第二次ネオ・ジオン抗争、シャアの反乱にも少なからず参加。さらに前世紀末に起こった、あのラプラスの史跡が永久になくなった『ラプラス事件』でもフリーランスの情報提供者として世界中を飛び回ったと聞いている。

本人は自分を『フリージャーナリスト』と称しているが、シャアの反乱で活躍したロンド・ベル隊の司令官や、一年戦争時の伝説部隊『ホワイトベース』の元クルーなんかともつき合いがある事から考えて、ただのジャーナリストじゃ無かっただろうことは、アムラスもこの歳になって何となくわかってきたことだった。

そんな行動的な母だけに家にいることは少なく、アムラスが幼少の頃は良くミルの家に預けられたのだった。

「そんなの昔から知ってるだろ……」

アムラスはそう気のない答えを返して荷物をリュックに詰め込んでいった。

「だいたい今の時代銃で撃たれたりの前に、メガ粒子で蒸発しちゃうって。骨すら残らないね」

「なによ、結局死んじゃうんじゃない。寝てる間にさ」

「むう……」

アムラスは自ら墓穴を掘ったことを悟り押し黙った。ミルはそん

なアムラスを見ながらクスッと笑った。

「ねえアム、この後用事ある？」

ミルはそう言っただけで自分の腕をアムラスの腕に巻き付けてきた。右腕の肘辺りにミルの成長した胸の隆起を感じさせるに十分な感触を伝えてきてアムラスは少々狼狽した。子供の頃は兄妹のように育ってきたせいかな、今までミルを女としてそれほど意識したことはない。ジュニアスクールやその上のジュニアハイスクールの時はそうでもなかったが、ハイスクールに通い出した辺りからめっきり女らしく成長したと感ずることがあり、同時に最近では女として意識せざるを得ない色香のような物を感じるようになった。

「別に…… あ、ただ今日はお袋が夕方帰ってくるから出迎えにでも行っただろうかな」

アムラスは腕に押しつけられたミルの胸の谷間をチラリと見てすぐに目を逸らしつつそう言った。

「あ、おばさま今日帰ってくるんだっけ。何時のエアバス？」

「香港からハワイ経由して来るって話だから夕方だってさ。時間判ったらまたメールするって昨日のメールでは書いてあったけど、お袋の場合どうかな？」

アムラスはそう言っただけで首を傾げた。アムラスは母親の時間のルーズさには慣れていた。別にだらしないというわけではない。ただ彼女の場合、途中なにか興味のある物に遭遇するとそちらを優先する傾向があったのだ。

（まあ、まっすぐは帰ってこないよな、たぶん……）

アムラスはそう心の中で呟きふうとため息をついた。

「おばさまお忙しいものね。でも私は好きよ、女の身でありながらあの行動力は憧れるわあ」

「それに翻弄される息子は大変だよ。もう慣れたけど」

「うふふつ、それにアムの場合、私たちが居るしね」

そう言っただけでミルは笑顔を見せ、持ち帰る荷物を詰め込んだ自分のバッグを肩から提げた。

「じゃあ夕方まで買い物に付き合つてよ。そしたら一緒に空港まで迎えに行きましょう」

ミルはそう言つて再度アムラスの腕を掴むとぐいぐいと引つ張り、アムラスはミルに引きずられるように教室を出ていった。

学校を後にしたアムラスとミルはエレカバスに乗り込み、駅前の繁華街に向かった。

午後半ばを過ぎたこの時間では乗客も疎らだった。リニアユニット独特の揺れ方をするバスに揺られながら、乗り込む際に走ったせいか少し蒸し暑さを感じて右手にある窓を開けた。

北アメリカ特有の乾燥した風は、アムラスを心地よく冷やしてくれた。窓の外には少しだけ感じる感じの、いつもの午後の町が流れていく。かつてはここも大きな鉄の巨人、モビルスーツが跋扈し、幾たびかの戦渦に巻き込まれてきたことは確かだが、UC0093に起こったアクシズショック、通称『シャアの反乱』以降、小規模な紛争はあれど大規模な戦争に発展するケースはない。アムラスはそのシャアの反乱前に生まれたが、物心付いたときにはもう戦争は無くなっていたのである。いわゆる「ノーウォーベイビーズ」の上期に当たる世代だった。

もう少し南に行けば過去の大戦で地球に落とされたスペースコロニーの残骸が落下した痕を見ることが出来る。本体の直撃は免れたものの、破片の雨はこの辺りにも落ちてきたと歴史の授業で習ったのをアムラスは思い出していた。

南米では先の大戦で連邦の本部があつたギアナ高地のジャブローが、一部の暴挙に出た将官達の手によって貯蔵していた核弾頭を起爆され爆発、未だに汚染地域として人の立ち入りが禁じられているという。

宇宙世紀が始まり早一世紀、人と人とは未だに分かり合えないま

ま今日に至っていると、一部の宗教じみた集団が説いているのを目にするが、それもはや過去のことになりつつあった。

歴史上唯一の統一国家である地球連邦政府の宇宙移民政策は、その構造上棄民政策だと主張するスペースノイド達との間で長い間火種となりくすぶり続け、数回に渡り大規模な戦争を起こしてきた。

しかし現在は地球の周りに浮かぶスペースコロニーを住居とする『スペースノイド』と地球に住む『アースノイド』と呼ばれる人間の格差は相変わらずだったが、お互いの相互軋轢はゆっくりと終息に向かっていた。

これは『長年血を流し勝ち取ってきた我々の成果だ』と連邦議会の議員は主張するが、何のことはなく、民衆は革命だの独立だのと言う物に飽きてしまったんだとアムラスは感じていた。

かつて、一番最初に独立を掲げ連邦と戦ったジオン公国の建国の父、ジオン・ダイクンは宇宙に出た人々は人類の革新、進化した新たな人類になりうる存在だと説いたという。

しかしその進化した人類と呼ばれた『ニュータイプ』もその名を聞かなくなって久しい。宇宙というマクロの空間を居住スペースとして利用する人類は、その広大な空間に適応する為に五感以外の感覚を身につけると言う説には確かに何となく頷けるフシもあるが、他者との感覚を共有しお互いを理解出来る、いわばテレパシーのような感覚を持つことになると言う下りはどこが現実味のない物だとアムラスは感じていた。ファンタジーと言っても良い。

だが過去の歴史を顧みればそんなファンタジックな事柄や人物達が実際に居たことは事実な様だった。しかしその殆どが戦渦の中で発現された事例ばかりだった。

その身につけた感覚で他者と誤解無く分かり合える存在のニュータイプ。

その言葉通りの存在なら、人は争わなくても済みそうなものなのに、何故戦渦の中でのみの事例しかないのか？ニュータイプとして覚醒する条件が戦争ならば、互いに誤解無く分かり合えるという

矛盾はどう説明する？

そんな疑惑が自然に巷に流布するようになり、いつしかニュータイプという言葉は『パイロット特性がある人』と同義を指す言葉として人々に浸透していった。

無理もないことだとアムラスは思う。戦渦でのみその感覚を表すのなら、ニュータイプは生まれてはいけない存在の様に思うのだ。戦争で多大な戦果を挙げる事しか示さないニュータイプに、幾たびの戦争を経験した人々は愛想を尽かしたと言った方が良さだろう。

未だにコロニー圏では地球との格差を訴え、非合法な手段で自分たちの正当性を示そうとする輩もいるらしいが、幾たびか重ねた戦争や紛争を経て、大多数の人々は結局何も変わらないという考えを持つようになってきているようだった。スペースノイド達の希望であつたニュータイプ思想もまた、そんな風潮に埋もれ時の流れに消えつつあつたのだった。

「ニュータイプか……」

窓からはいる風に目を細めながら外を眺め、アムラスはそう呟いた。

「ねえアム、今回おばさまどこに行つてたの？」

不意に隣に座っていたミルがそう聞いてきた。アムラスは少し考えながら答えた。

「えつとたしか…… キュウシュウ…… キュウシュウって言うてたかな」

「キュウシュウ？ 聞いたことがないわね。どこにあるの？」

聞き慣れない言葉にミルは首を傾げる。答えたアムラスも発音が判らず少々たどたどしかった。

「ジャポンだつて言うてたかな。ジャポンのキュウシュウって」

「ああ、ジャポンね。たしかお祖父ちゃんの故郷って聞いたわ。行ったこと無いけど。ジャポンの地名って変な名前が多いわね」

ミルはそう言うてもう一度「キュウシュウ」と呟いて笑った。

「アジアにある島国よね、たしか。何しに行ったのかしら？」

「人に会って話を聞きに行くって言ってたよ。なんか知り合いに頼まれたんだって。つってもどうせ自分の仕事も兼ねてるんだろっけどさ」

アムラスは少し呆れたようにそう言っただけで肩を竦ませてみせた。

「じゃあ何かの事件の関係者なのかな？ 会いに行った人って」

ミルはさらに目を輝かせて聞いてきた。ミルはアムラスの母親のその行動力だけでなく彼女の仕事にも憧れていた。たまに帰ってきた母の酒の相手を付き合わされ、先にダウンしてしまうミルの父親に変わり、ミルは良く彼女の話し相手をしており、色々な話を聞くうちに『ジャーナリスト』と言う職業にも密かな憧れを抱き始めていたのである。

「3年前のアレだよ。テロリストがオーストラリアのアデレードにある連邦政府議会に攻撃を仕掛けた事があつたら？ あの事件の関係者だって」

「ああ、なんだっけ？ 確かマフティーとか言うテロ組織よね。でもあれってリーダーの人捕まって処刑されちゃったんでしょ？ なんかニュースで見たよ」

ミルは目を泳がせながら記憶を辿るような仕草をしてそう言った。「うん、俺もそのニュース見た。良くわからないけど、なんかその時リーダーを掴まえた人だとか言ってたな。3年も前の事件のこと聞いてどうするのか知らないけど……」

アムラスの答えにミルは「ふん」と返して鞆から携帯端末を取り出し操作をし出した。どうやらもう話しに興味が無くなったようで、タウン情報からお店を検索している。

アムラスはそんなミルから目を逸らせ、再び窓の外を流れる景色を眺めながら当時TVでみたニュースの映像を思い出していた。

画面がフラッシュしたように絶え間なく光る。その閃光と共に響く爆発音。その様相は戦争を知らないアムラスにとっては戦争そのものにしか見えなかった。そして時折画面に映る独特な形のモビルスーツが印象に残っている。ベースジャバーなどのサブフライトシ

ステムを使わず、単独で飛行している様に見えた。そしてそのシルエットはかつて1年戦争と言われる大戦の渦中で活躍した、地球連邦軍初の実戦モビルスーツ『RX-78』コードネーム『ガンダム』と呼ばれた機体に似ていた。1年戦争後の幾たびかの紛争でも、そのガンダムの意匠に酷似した機体が活躍した記録が残っている事から、恐らくあれも同系列の機体であろう事は素人のアムラスにも容易に想像が付いた。ただ、戦っている相手もまた、そのガンダムの意匠を引き継いだ機体だったことにアムラスは違和感をもっていたのだった。

（そう言えばお袋、よく話してたな、ガンダムとそのパイロットの話……）

アムラスは母親が飲んで酔ったときに良く昔の事を話していたのを思い出していた。

アムラスの母親は当時の様子を良くアムラスに聞かせた。どんな戦闘だったか、そこで自分が何をしたのか、楽しかったこと、恐かったこと。その時々的事について、自分の意見や考えを交えながら話していた。当時アムラスはまだ子供で良くわからないことも多かったが、なかなか家にいない母親との会話に喜んで付き合っていた。だが、そんな様々な話の中で、何故か時折言葉を濁す部分があった。幼い頃はそれに気付かず、霧中で母の話を聞いていたアムラスだったが、成長するに従いそれがあることに起因していることがわかり始めた。

恐らくそれは、自分の父親についてのことだろうとアムラスは薄々当たりを付けていた。

アムラスの母親はアムラスの記憶では今までに2度結婚し、いずれも離婚・死別している。母に自分の父親のことを尋ねると、自分が物心付いた時に側にいた最初の母の夫、イラムという男がそうだと答えたが、アムラスは何故か違和感を感じていた。別にイラムが自分に辛く当たったとかではない。なぜだか判らないが『この人は自分の父親ではない』と直感的に感じていた。そしてイラムと別れ、

2番目の夫となった男は民間の航空機パイロットだったが3年前に飛行機事故で亡くなった。アムラスの母親は気の強い女性だった。2番目の夫の葬儀の時も涙を見せなかったと記憶している。

だが、そんな気の強い母が時折自室に籠もり泣いていることがあるのをアムラスは知っていた。それは大抵どこか遠くから帰ってきたときで、寝室のベッドに腰掛け1枚の写真を取り出し、それを見つめながら声を殺して涙する母の姿をアムラスはドアの隙間から見かけたことが何回もあった。

アムラスは1度だけ、母がひとしきり泣いた後シャワーを浴びる為バスルームに向かった際に、ベッドに伏せられたその写真を盗み見たことがある。

それはどこかの搬入デッキ、恐らくモバイルスーツデッキと思われる場所で、白地にオレンジのラインの入ったパイロット用ノーマルを着込んだ男が映っていた。

少し癖の強い髪の毛、どことなく童顔の顔立ち、そして透き通るような綺麗な目をした男が、意志の強そうな顔でこちらを見ていた。アムラスは何故かこの写真に写っている人物が、もしかしたら自分の本当の父親かもしれないと直感的に思ったのだった。

あれ以来その写真を見たことはない。母に聞いてもそんな写真は知らないと誤魔化された。結局未だにその写真の人物が誰なのか、何という名前なのかは判らない。だがあの写真に写っていた男の綺麗な瞳の色だけが数年経った今でも妙に記憶に残っている。

母親が何故あの写真の人物を自分に教えてくれないのかは判らない。だが確かに知りたいとは思うが、母が言いたくない事をしつつも追求する気はアムラスにはなかった。母が教えないのには何か理由があるからだ。それは母とその人物が別れた事に起因しているのかもしれないとアムラスは思った。

なぜなら、母は恐らく今でもその人をとて愛しているから……そうでなければあの気の強い母が泣くはずがない。2度の結婚と別れを経験しても尚、あの写真を見て涙する母の姿にアムラスはそ

う感じていた。

（親父か…… あの人が俺の本当の親父なんだろうか…… 一体どんな人だったんだろう）

アムラスは記憶に残る写真の、名も知らぬ人物に思いを馳せるのだった。

先ほどから鳴り響く警戒アラームがコクピット満たし、球状に配された360度モニターに赤いアラートサインが五月蠅く明滅する様を睨みながらマルガット・ベントーは吐き捨てるように罵った。

「サナリイのボンクラどもが、いくら新技術だからって乗りこなせないモン作ってどうすんだよっ!!」

必死にアームレイカーを操作し、足下のフットペダルを蹴り飛ばすが、機体の降下は収まる気配がない。この機体を運んできた大気圏突入シャトルにランデブーし、シャトルを爆破と同時に飛行を開始、ついさっきまで高度10000メートル付近を順調に飛行中だったにもかかわらず、北米大陸まで500kmを切った辺りから機体がブレ始めその後急激に高度が下がっていった。右上に表示されたデジタル高度計はもう4000を切っている。

「マルガット! コントロールは回復したかっ!？」

ノーマルスーツのヘルメットに木霊する声は機体を襲う小刻みな振動で若干震えて聞こえた。

「今必死にやってるよっ! ミノフスキーコンバーターさえ起動すればとりあえず降下は止まるハズなんだっ! バイヤ、外から見て機体外装に変化は無いのか!？」

そう怒鳴ると一呼吸おいて通信が返ってくる。

「ここから見る限りでは外装は特に何の変化も見られない。フライトユニットにも損傷はないし、機体本体も本来の色に戻っている。さっきまで順調だったのになんでだっ!？」

マルガットはその言葉を聞きながら右側に視線を走らせた。モニターにはSFS「サブフライトシステム」のギャルセゾンに乗った赤いMSが映っている。先ほど交信してきたバイヤ・オズマリーが駆るMS、型式番号Me02R『メッサー』という機体だ。

先の紛争シヤアの反乱の際、ネオ・ジオン側の主力MS『ギラドIガ』の流れを汲む第5世代型のMSである。元を辿れば旧大戦のジオン公国軍で量産された第1世代型MSである『ザク』の意匠を引き継いだ汎用MSで、3年前の『マフティー事件』でマフティー側が使用したのが最初の実戦投入だった。

MS開発最王手メーカーであるアナハイムエレクトロニクス社製のMSだが、アナハイム社のライバルである官民複合公社『海軍戦略研究所（Strategic Naval Research Institute）』通称サナリイ（S・N・R・I.）から盗み出した情報を元に開発したというスキヤンダラスな噂がある曰く付きの機体だ。汎用性に富み複数の火器オプションを備え、また内蔵火器も備え持つ。高出力のジェネレーターとその恩恵に預かった強力なスラスタによって高い運動性を持つハイスペックな機体だが、その分コストが高く生産数は十数機となっている。

「わからん、いきなりAIサポートが停止してシステムがダウンしやがった。さつきから何度も再起動を掛けてるがウンともスンとも言わねえ。幸い従来のノーマルOSは問題なく動くからMS本来の稼働は問題ないが、このままじゃ並のMSと変わらない」

マルガットはそう吐き捨てる様に言って再度再起動の手順を繰り返す。

（いや、新技術のニュートリノタービンが動かないんじゃ、そんな余計な物が付いてる分機動性は確実に落ち込む。並以下かもしれない……）

マルガットはそんなことを思いながらセンターコンソールを操作していた。

（いくら『ブレイン・インターフェイス』で動くことを前提に作ら

れているとはいえ、それそのものが動かないんじゃないかと話しにやらんだったらがっ！！）

事前に貰った資料とデータでシミュレーションしていたので、一通りの概念や操作は理解している。機体を受け取った直後は間違いなくシステムは起動していたのだ。なのに飛行開始10分も経たないうちにいきなりシステムがダウンした。全く意味がわからなかった。

「欠陥機なんじゃないかコイツはっ！？」

再度試みた再起動の失敗を告げるエラー表示がコンソール上に映し出された瞬間。マルガットの口から思わずそう声が出た。

『マルガット、もう良い、フライトユニットを放棄してこっちに飛び移れ。機体本体だけでも持ち帰りたい』

そんなバイヤの声が鼓膜を叩く。マルガットはその声に怒鳴り返した。

「俺はニュータイプだ！俺以外にウチで誰がコイツを動かせるって言うんだよっ！俺が出来なきゃ持つて帰ったところで鉄クズとかわらねえっ！！」

マルガットは吠えながらアームレイカーをガチガチと引き、高度計を睨んだ。もう3000を切っている。

マルガットは仲間内では最もMSの操縦が優れていた。訓練の模擬戦でも相手の先を読み自機を操るのを得意としており、皆からは『ニュータイプ』と呼ばれていたのだ。マルガットもそんな仲間の言葉に気を良くし、何時しか自分でも『俺はニュータイプ』と感じるようになっていた。そんな彼だからこそその先ほどの言葉なのであった。

今回MS公社であるサナリイから極秘裏に入手したこの機体、RXF-108BD、開発コード『ビースト』はサナリイが極秘開発している新企画に基づいた小型化MSのプロトタイプだった。従来の熱核反応炉とミノフスキージェネレータの組み合わせではなく、新開発のニュートリノタービンという新媒体の加圧出力タービンを

組み合わせることによって、従来の熱核反応炉を小型化するという画期的なハイブリット新型動力を初めて実装した機体だ。

これは連邦の軍縮が進む中、年々巨大化するMSのサイズによって新たに更新される整備や施設、艦船のペイロード変更等で設備に掛かる軍事費の増大に楔を打ち込む目的で進められている『小型MS開発計画』の先鞭としての側面があり、この『ビースト』もそう言った流れから生まれた機体であり、そのテストという意味合いも含んでいる。

しかし連邦と癒着の強いアナハイム社にとって、MSの大型化に伴う軍需増大はむしろ喜ばしい事であり、逆にMSの小型化を提唱するサナリイは『目の上のたんこぶ』以外の何物でもなく、両社の間では水面下で熾烈な対立が加熱していたのである。

ただ、組織の大きさや独自で所持する施設の大きさでは、サナリイはアナハイム社には遠く及ばず、次期採用機の開発競争では一歩遅れをとっていた。

そこで、サナリイの一部の技術者は極秘に開発した機体を、自社で投資している議員を使い、裏でテロリストや活動家達に渡して実戦テストをしているのである。今マルガットの乗っている『ビースト』も、そんなサナリイという企業の思惑が絡んで自分たちの手に渡っている機体であった。

非合法ではあるが実戦テストを兼ねた機体なので『ビースト』には新型エンジンの他にも、採算を度外視した最新の技術が惜しみなく導入されていた。その一つが、先ほどからマルガットが再起動を試みている『ブレイン・インターフェイス』と、それに連動した機体管制サポートAI『ウィップ』だった。

マルガットが読んだ資料によれば、この2つで新型ドライブである『ビーストドライブ』を制御するとあった。この3つがRXF-108をフルコントロールする為のメインOSであり『ビーストマスター』と呼ばれる機体管制システムとのことだった。

（どんなに凄いシステムでも、動かなきゃ意味がない。クソ……っ

！）
マルガットは心の中で再び毒づいた。とその時、不意に事前に確認していたデータの中で動画があったことを思い出した。内容はこのRXF-108のシステム概念の説明だった。その時画面で喋っていた技術者の言葉を思い出していた。

（———ですので、このRXF-108には『操縦する』というスキルはいりません。はっきり言ってしまえば、ビーストマスターシステムが正常に稼働すれば、アームレイカーやフットペダルは飾り同然になります。では、どうやって機体を操るのか？

イメージです。頭でイメージするのです。パイロットのイメージに沿ってRXF-108は動くでしょう。ただし、プログラミングされているAIは機体の性能をフルに引き出そうとします。ですので『操縦する』という感覚は捨ててください。イメージでRXF-108を従わせるのです。

AIと言うウィップ【鞭】を使い、ビースト【猛獣】を従わせる。文字通りビーストマスター【猛獣使い】となつてね———）

「イメージ…… 猛獣使い……」

マルガットはそう呟きながら、頭の中で大きな獣を思い浮かべ、そこに鞭を振るい従わせる自分をイメージを必死で沸かせようとしていた。

『もうすぐサンフランシスコだ。まずいぞマルガット、あそこは連邦のベースがある。補足されたら袋だたきだぞ！』

そんなバイヤの悲鳴のような声も、マルガットの耳には入っていなかった。ただひたすら自分の乗るこのマシーンを従わせるイメージを脳内に沸かせる事に集中していた。

『逆探知されてもかまわん、ミノフスキー粒子を散布するぞ。このままじゃ良い的になる！ マルガット、聞いているのか、返事をしろっ！———』

尚も怒鳴り声を上げるバイヤを無視して、マルガットは強く念じた。

（俺に従え……っ！！）

「俺に……」

不意に口から零れるようにそんな呟きがマルガットの口から漏れた。

「従え——っ！！」

そう叫んだ瞬間、正面のセンターコンソールにさっきからせわしく明滅していたエラーの表示が消え、変わりに緑の文字の羅列がスクロールして上に流れていく。

さっきから不規則な落下の振動しか伝えてこなかったリニアシートからは全く違う低い唸りと共に規則正しい振動が尻の肉を振るわせる。

システムスタンバイ

未だに五月蠅く鳴り響くアラート警報はそのままだが、その女性の声を模したデジタル音声はマルガットの耳に何故か明瞭に届いた。一方、マルガットの乗ったRXF-108の横を飛んでいたバイヤは、一瞬ブルツと体を震わせたRXF-108を見てぎよつとした。その動きはまるで、生き物が目覚めたような、そんな生物的な拳動に見えたからだった。

そして頭部がゆっくり持ち上がり、RX系特有の二対のデュアルカメラが緑色に輝いた瞬間、バイヤは背中に冷たい物を感じ、再びその身を震わせたのだった。

「マル、ガット……っ？」

そう両機に呼びかけるバイヤの声は、何故か震えていた。

(1) (後書き)

どうも、鉄屋でございます。

ガンダムの二次物は『レンズの向こうのアイリー』と言う物を書いているんですが、知人から『ガンダムらしくない』と言われ、じゃあガンダムっぽい物語も書いてみようかと思い、思いっきり趣味に走って書いてしまいました。

ええもうガンダムシリーズを知ってる方ならお約束の展開ですw
さて、この主人公のアムラス、勘のいい人ならもうバレバレかもしれませんね。母親の名前は次回で出しますが、父親の名前は今のところ出す予定はありません。だって判る人はわかってしまいますものw
まあ母親の名前もバレてますけどね。

時代はUC - 0108、マフティー事件の3年後の物語です。位置づけとしては小説版『閃光のハサウェイ』の続きですので、劇場版アニメとは若干のズレがあるでしょう。

一応断っておきますが、あくまで私の独断と偏見、そして希望的妄想で書いてますんで「オイ鉄屋、てめえそりやねえだろう、アン？」的なコメには答えられませんw

あ、でも情報は大歓迎ですがwww(オイ！)
ちよつと勢いとノリで書いているので、みんなが納得するような物であるかなんて全然考えてないです。

キツカケは久しぶりに『逆襲のシャア』を見たことでした。主人公が結局行方不明なんて哀しいよなあとか思ってたw

面白くなければ削除しますので感想コメントで仰ってください。続きが読みたいと言う意見が有れば頑張ってみよう…… かな？(マテコラ)
ま、まあとりあえず次は書いてますんで次回もありますw

鉄屋でした。

(2)

繁華街に着いたアムラスとミルはターミナル前の百貨店に入った。エスカレーターで3階まで上がり紳士物の衣類の店を数軒回っていた。

ミルの父親であるダイスケが来週誕生日で、そのプレゼントを選ぶのにミルは男性であるアムラスの意見を聞こうというわけだった。幼い頃からアカギ家にお世話になっているアムラスにとってもダイスケは恩のある人で、父親の居ない自分の父親代わりをしてくれただけに、アムラスも毎年お祝いの品物を贈っているのだが、どういふ訳か今年はすっかり忘れていたのだった。

「洋服つてやっぱり迷うなあ……私のセンスがパパにはわからないからなあ」

ミルがそう言いながら吊つてあるジャケット数枚出して吟味している。

「アムはもう決めたの？」

そんなミルの言葉に、誕生日の事をすっかり忘れていたアムラスはドキツとしたが、その事は顔に出さないよう注意しながら答える。「オジサンの誕生日来週の木曜だろ？俺は来週に買いに行こうと思つてたんだよ」

「ふーん……あ、でも服はダメよ、私が贈るんだから」

ミルは手に持っていたジャケットを背中に隠し、得意顔でアムラスにそう言つた。そんな事を得意になつて言う仕草は子供の頃と少しも変わつておらず、アムラスはおかしくなつて口元をほころばせた。

「しないよ。だいいちサイズがハッキリ判らないだろ。アクセサリとかかそう言うグッズにしようかつて思つてる。財布やパスケースなんかも良いかもな」

「えー、アム一昨年もお財布だったじゃん」

ミルの指摘にアムラスは言葉を詰まらせた。そう言えば確かに一

昨年本革の財布を贈ったのだ。この時代本革は高級品だったが、散々迷ったあげく『長く使える』と思い奮発して買ったのを思い出した。ダイスケもとても喜んでくれて、今でも使ってくれている。『べ、別に財布にするって言ってないだろ。とにかく俺は小物にするよ』

ミルにそう答えながら、アムラスは『去年は何を贈ったわけ？』と必死に思い出していたのだった。

「小物かあ…… こう言うとき男同士って良いわよね。趣味が大体判るから。ずるいなあアム」

「そんなこと言ったらおばさんやお袋の時は俺も同じだよ。女って喜ぶ物が年齢によってガラリと変わるし、ミルがおじさんに贈る時より苦労してるよ絶対」

アムラスは去年ミルの母親であるミランダのプレゼントを選ぶのに苦労したのを思いだしたため息をついた。

「私の時も？」

ミルはそう言ってアムラスの顔を覗き込んだ。翡翠の宝石のようなミルの瞳が自分を映しているのにドキッとして、アムラスは慌てて目を逸らした。

「当然だろ。女の子の趣味なんて分かるわけが無いじゃないか」

そう言うアムラスにミルは含み笑いをする。

「ふふっ、女はね、男の人がそうやって自分の為に苦労して選んでくれる事が嬉しいものなのよ」

アムラスはそんなことをさざりと言って微笑むミルに大人の女性の雰囲気を感じ、ドギマギした。そして体だけでなくそういった精神的な面まで大人びてきているミルが、自分よりも全然大人に見えたのだった。

（ついこの間までは全然感じなかったのにな……）

そんなことをぼんやり思いながら、アムラスは服を選ぶミルを見つめていた。いや、この大人の階段を登り始めた幼なじみに見とれていたと言う方が正しかった。するとアムラスの視線を感じたミル

が不思議そうに聞いてきた。

「なに？ 私に何か付いてる？」

ミルにそう聞かれ、アムラスは慌てて首を振った。そして同時に鼓動が早まり、続いて恥ずかしい気持ちで一杯になった。

「い、いや、別に何でも無いよ」

自分がそんな気持ちになってしまった事を絶対悟られなくなかったアムラスは、そう言ってすぐに俯き、彼女とは反対側の列にあるジャケットを手にとって選んでいるフリをした。一方ミルはそんなアムラスを見て首を傾げつつ「変なアム」と呟いて再び服を手に取りプレゼントの選定を再開した。

（みんながニュータイプになったら、俺は恥ずかしくてミルに顔を合わせられないな）

アムラスはそんなことを考えつつ、胸の鼓動が治まるのを待ったのだった。

「お客様、おくつろぎの所失礼します。お代わりはいかがですか？」通路側から掛けられた声に振り向くと、客室乗務員が上品な笑顔で立っていた。シートに備え付けの簡易テーブルに乗ったワイングラスが空なのに気づき気を利かしたようだった。

「そうね、頂こうかしら」

読んでいた雑誌から顔を上げ、ベルトーチカ・イルマは彼女にそう告げた。彼女は「かしこまりました」と丁寧にお辞儀をし、テーブルのグラスを下げ、新たなグラスにワインを注いだ。

「さっき到着時刻が19時って出ていたけれど、少し遅れたの？」ベルトーチカは手首のウォッチをチラリと見ながらワインを注ぎ終わった彼女に聞いた。

「いえ、当機に遅れはありませんが」

「あらそう？ 出発前に計算したら到着はもう少し早くなるかと思

ったのだけれど」

「ああ、それは現地は現在サマータイムですので1時間ほどの誤差がございます。そのせいではございませんでしょうか？」

「ああそうね、すっかり忘れていたわ。ごめんなさい、変なこと聞いちゃったわ」

「いえいえ、また何かありましたらお気軽にどうぞ」

ベルトーチ力の言葉に彼女はそう言うて頭を下げ離れていった。

（そうだったわ。サマータイムのことを考えていなかった。アムには悪いことをしたわね）

ベルトーチ力は出発前にアムラスにメールで到着予想時間を知らせていた。空港のインフォメーションボードを確認すれば一目瞭然でこんな間違いは起きなかったのだが、現地を立つ際、色々と所用が出来てしまい手間取ったので、航空機パイロット時代を思い出して手元の端末で時間を計算したのだが、その際に夏時間を計算に入れてなかったのだった。

（たぶんアムラスのことだ。私の到着に合わせて空港に来るだろう。1時間遅刻だわ。ごめんなさい、アムラス）

ベルトーチ力はそう心の中でアムラスに詫びながら、自分の帰りを待っているだろう息子の顔を思い出した。記憶の中のアムラスは、少し幼さを残した笑顔で笑っている。

少し尖った鼻筋と口元は自分に似ているが、癖の多い髪と澄んだ綺麗な瞳は父親譲りだ。それに最近、ふとした瞬間の仕草があの人のとてもよく似てきたと感じる。あの包み込むような優しい笑顔が特によく似ていると思うのだ。

ベルトーチ力はそんなことを思いながらワインを一口含み、シート2つ分先の窓を眺めた。西に傾いた陽光が、翼の先に広がる雲を朱色に染めている。

若い頃は良く自分で複葉機を駆り自由に空を飛んだものだ。父がカラバを支援していたのがキツカケで、そのまま反地球連邦政府活動に身を投じたのは、確か二十歳の頃だった。単機でティターンズ

の制空エリアすれすれを飛び、そのまま無理矢理カラバ所属のガルダ級大型輸送機アウドムラに着艦した事もあった。あの日のことは今でも鮮明に覚えている。

あの日は2人の男に出会った。一人は赤い士官服で金髪、額に残る傷とサングラスが印象的な男。そしてもう一人はその傍らに立つ、どこか少年のような印象をもった寂しい目をした男。今となつては、あの2人が同じ陣営の人間としてあの場所にいたことが嘘のように感じることもある。

片方はまるで抜き身の刀のような鋭さをもち、もう一人は何かに怯えながらも、優しい暖炉の様な暖かさを滲ませていた。お互いがお互いを認め合っているけれど、決して相容れない物があつた。目指すところが同じなのかもしれないけれど、歩む道は決して交わることはない。ただどちらもまっすぐで、そして危ういほど純粹すぎた。その点については2人はとてもよく似ていたのだ。

（そして私はあの瞬間から、恋に落ちていたのだと思う）

望まざる大きな力を得てしまったが為に、誰からも本当に理解されることもない。若くして人の死を見つめ続け、それでも尚人の可能性を体現し続けなければならない者の苦悩。

確実に戦争の道具に使われる自分の能力を恐れ殻に閉じこもりうとする彼を、私は再び戦場へと誘った。あの時はそうすることでした。彼の魂を開放できないと思った。そういう時代だったって事もある。

ベルトーチカの脳裏に、当時の想い人の姿が浮かび上がっていた。
（ううん、違うわね。私は見ていたかったのよ……）

ベルトーチカは朱に染まった雲海を、目を細めて眺めながら心の中で呟いた。

（あの人が戦う事でしか輝けないのならそれでも良い。私は、輝いているあの人を、生き生きとしたあの人の姿を側で見ていたかったのよ）

そして成長した息子に、かつて愛した男の姿を重ねている自分が

滑稽でベルトーチカは薄く笑った。そして同時に、自分の心の中にまだその男の記憶が刻みつけられていることを自覚する。別れてもう16年になるのに、自分がまだ彼を深く愛している事も……

シアアの反乱の後、彼の乗った機体の搜索が打ちきられたと、彼が所属していた隊の司令官から連絡が入ったとき、なぜか自分は哀しみが沸いてこなかった。『ああ、そうか……』と簡単に受け入れることが出来た。いや、自分はもつと以前に受け入れていたのだ。

あの『アクシズ・ショック』と呼ばれる日に、TVに映った地上から観測されたアクシズの映像がベルトーチカの脳裏に浮かんた。

虹のような光に包まれるアクシズを見たとき、彼の魂が溶けていくのを感じたような気がした。人の意志の力、無限の可能性を導き出す優しくて力強い光の色。

それを世界中の人々に見せる為に、彼の魂は宇宙に溶ける必要があった。ベルトーチカはそう理解した。いや、そう理解できてしまったと言った方がよい。そして自然に涙がこぼれた。

ただただ静かに流れ出る雫が頬を濡らしているとき、傍らのベビ―ベッドに眠っていた小さなアムラスが目を覚ました。ベルトーチカが涙を拭きながらアムラスを抱き起こすと、アムラスは無邪気に笑いながら小さい声で初めて自分を「ママ」と呼んだ。その時、ベルトーチカは思ったのだ。

（あの人は溶けても、無くなってなんかいない。私の腕の中にこうして確かに存在しているもの……）

だから受け入れられたのかもしれない。アムラスがいてくれたからこそ、私は彼の意志を正しく受け止められたのだ。

不意にベルトーチカは手元のバッグから1枚の写真を取り出した。それはいつかアムラスが盗み見た古い写真だった。綺麗に澄んだ瞳の男がまっすぐこちらを見ている。

「ねえ、あなたもそう思うでしょう？」

ベルトーチカはそう写真に語りかけた。そして優しい笑みを浮かべると、グラスに残ったワインを口に含んだ。そんな彼女の耳には

「そうだね」と答える優しい男の声が確かに聞こえていた。
そうしているうちに彼女の乗った飛行機はゆっくりと高度を下げ、
やがて着陸態勢に入った。

アムラスとミルは買い物を終え、空港内のロビーにあるカフェで
ベルトーチカを待っていた。アムラスはミルをカフェに残し、到着
ロビーの奥にあるカウンターでベルトーチカが乗っている便の到着
時間を確認し、再びカフェに戻ってきた。

「やっぱりお袋、到着時間間違えてる。19時到着だったよ」

アムラスは席に着くなりそう言っただけ肩をすくめた。

「変だなって思ったんだよ。家の端末で調べたら時間違ったからさ。
ごめんなミル」

「ううん、良いよそんなの。私もおばさまを出迎えてあげたいし。
それに買い物もつき合ってもらったし」

ミルはそう言っただけカップのキャラメルマキートをすすった。甘
い香りがアムラスの鼻にまで漂ってくる。

「あと10分ぐらいでしょう？ そろそろ到着口の方に移動してお
かなくて？」

ミルの言葉にアムラスは頷いた。

「そうだな、それ飲んだら移動しよう」

それから少しして2人はカフェを出て到着ロビーに向かった。空
港内の混雑具合はそれほどでもなかったが、平日にしては少し人が
多いようにアムラスは感じていた。

移動している途中、2人ほど連邦軍の制服を着て、肩からマシン
ガンを提げた兵士とすれ違った。3年前のマフティー事件でテロに
対する警戒が強まったのが原因だろうが、こう人通りの多いところ
で警察ではなく軍の兵士が、実弾が装填されたマシンガンを素で持
ち歩く姿は少し異様だった。特にどうと言うことはないが、アムラ

スはなるべくミルが銃から影になるよう努めて歩いた。

到着ロビーで待っていると、すぐにベルトーチカが乗った便が着いた事を知らせるアナウンスが流れた。そしてしばらくしてその便に乗っていた乗客達がバラバラとゲートから出てきた。

アムラスとミルはその乗客達の顔を一人一人見ながらベルトーチカを探した。するとその中にベージユのキャスケットを被ったベルトーチカを見付けた。

「母さん、こっち！」

アムラスが手を上げてそう叫ぶとベルトーチカも気づき、アムラスに向けて微笑んだ。そしてトラベルケースを引きずりながらゲートを潜り、乗客の列を抜けてアムラスとミルの前まで来た。

キャスケットと同じ色のジャケットとパンツに身を包んだ姿は、細身のベルトーチカにはよく似合っていた。今年で42歳になるが、外見はともそうは見えないとアムラスはいつも思う。行動的でいつも忙しく自分の思うとおりに動く女性だから、なおのことそう見えるのかもしれない。

「ただいま、アム。ミルもわざわざありがとう」

ベルトーチカはそう言つて2人に笑いかけた。

「お帰り、母さん」

アムラスはそう母に声を掛け、抱擁した。続けてミルも「お帰りなさい、おばさま」とベルトーチカに抱きついた。

「ごめんなさいね2人とも、私到着時間間違えてしまつて。夏時間のことですっかり忘れていたわ」

「ううん、気にしないでください。私アムに買い物つき合つてもらつてましたし」

ミルは手を振つて答えた。

「あら、もしかしてデート？」

「違うよ、来週おじさんの誕生日だからさ、見立てに付き合つただよ」

アムラスは慌てて否定しそう答えた。そんなアムラスを見てベル

トーチカはクスッと笑った。

「そうなの？ 残念。でもアムが相手じゃミルに失礼よね」

ベルトーチカがそう言ってミルにウィンクすると、ミルは少し頬を染めながら「もう、おばさまったら」と呟いていた。

「そうね、ダイのバースデー近いものね。私ももう用意してあるのよ？ ジャパンで買ってきたの。ジャポンの夏の着物で『ユカタ』って言うのよ」

ベルトーチカはそう言ってニッコリ微笑んだ。ミルは「へー 見たいな」と言うがベルトーチカは「まだダメよ、お楽しみね」とミルに答えていた。

「一つ持つよ、母さん」

アムラスはそう言って手を出した。ベルトーチカは「ありがとう」と言いながら肩から提げていたトートバッグをアムラスに渡した。中身はどうやらおみやげらしかった。

「さて、帰ろうよ」

アムラスのその言葉を合図に3人は歩き出した。

ベルトーチカが乗った便が到着した直後、空港の管制塔にあるコントロールルームで管制官達が大声で叫んでいた。

「北西の方向、距離約300km、アンノン依然こちらに向かって接近中です」

部下の報告を受け、フォルマリー管制室長は腕を組みながら航空レーダーを睨んだ。赤い光点が2つ、中心に向かって高速で接近して来るのが確認できた。

「次の便は何番だ？」

「フラデリカ47便です。現在高度3000で待機中。その次はエアフランス72便、その後3機続いています！」

後続の着陸予定便を聞きながらフォルマリー舌打ちした。

「上空に待機中の全機に燃料の残量を確認。余裕がある機は全て口スに回せ！」

フォルマリーの言葉に慌ただしく管制官達が動き出す。

「このスピードは民間機じゃありませんね、室長」

フォルマリーの横で同じようにリーダーパネルを睨んでいたバグス管制官がそう呟いた。バグスは長いことフォルマリーの補佐を勤めるベテラン管制官だった。彼の存在がフォルマリーの手腕の一部を支えていると言っても良い。

「どこの馬鹿だ、この民間高度に突っ込んでくるなんてっ！」

バグスの言葉にフォルマリーは吐き捨てるようにそう言って右拳を左の手のひらに叩き付けた。

「ロスのビルダー基地を呼び出せ！ 思いっきり抗議してやる」

フォルマリーは連邦軍が好きではなかった。特に例の『地球連邦調査権修正法案』が可決されてからの連邦軍の横暴ぶりは目に余る物があった。3年前のマフティー事件では、流石に口に出しては言えないが、心情ではマフティー達を応援したい気分だった。

「ビルダー基地、繋がりました。指令のケスネッグ大佐です」

そう言いながら受話器を差し出す部下の手から受け取ったフォルマリーは保留解除ボタンを押すと同時に受話器に向かって叫んだ。

「どういふつもりです！ こっちはこの1時間に5機着陸させなければいけないんです。訴えますよっ！！」

思わず大きな声が出たが、フォルマリーは気にしなかった。腑が煮えくりかえる思いだったが一応言葉遣いを考慮する理性だけは働いたようだった。

『こちらでも確認している。だが君、あれは我が軍の物ではない。完全なアンノン機だ。こちらで直ちにスクランブルを掛け2分前にMSを3機ゲタで発進させた』

電話越しのケスネッグの言葉にフォルマリーは言葉を失った。軍の機体じゃないとすると…… まさか！？

フォルマリーの脳裏に3年前の事件が浮かんた。

（まさか、テロかつ！？）

そう思った瞬間、リーダーパネルを見ていたバッグスが叫んだ。

「ちっ、ミノフスキー粒子だ。それも戦闘濃度だぜ、こりゃやばいぞっ！！」

その言葉を聞き、フォルマリーは受話器を持ちながらパネルを見て唖然とする。パネルの半分が白いノイズで覆われ、先ほど見た2つの赤い点が飲み込まれていた。

『こちらでも確認した。後3分弱で我が軍の先発がアンノンと接触する。念のため地上部隊もそちらに回す。もう切るぞっ！！』

ケスネツグはそう言ってこちらの了解も取らぬまま電話を切った。フォルマリーは受話器を部下に渡し、直ちに緊急事態時の指示を飛ばした。

「各セクションに緊急連絡っ！ 滑走路及び格納庫で作業中の職員は速やかにシエルターに避難。発着ロビーの客達に緊急の避難命令を発令。それと、最寄りの警察署と消防に連絡しろ！ それに病院にも連絡を忘れるな、急げっ！！」

フォルマリーは怒鳴るようにそう指示を飛ばし、管制棟の耐風圧硝子の向こうに見える、朱色に染まった空を睨みながら奥歯を噛みしめた。

どう考えてもいやな予想しか浮かんでこない。だがこう言うときは最悪の状況を考えて行動するのが一番だと自分に言い聞かせていた。それは自分の経験から導き出した答えだった。フォルマリーは今年で45歳になる。過去に起こった大きな紛争も当時はまだ管制官として経験していた。その当時の経験が今の彼の的確な判断に繋がっているのである。

一通りの指示を飛ばし、フォルマリーは朱に染まる空に、誰とは無しに呟いた。

「何が…… 始まるんだ！？」

当然、フォルマリーのそんな声に答える者などいないことも、彼は良く知っていたのである。

(2) (後書き)

初めての人は初めまして。毎度私の拙作を読んで下さる方は毎度どうもです。

鉄屋でございます。

いやもう筆が進みまして、早くもその2をUPですw

まあこれからまた若干忙しくなってしまうのでアレですが、なま暖かい目で見守って下さいwww

さて今回はやっとアムの母親が出てきます。ええもう皆さん分かっていると思いますが、ベルトーチカ女史です。彼女のキャラですともう少しドライな感じかな？ とも思ったのですが、もう間違いないく40歳は越えてるでしょうし、子供もいるので人間的に余裕があるかなって考えてこんな感じに書いてみました。どうです？ イメージと違います？

一番気になったのが彼女が『名前を言っではいけないあの人(笑)』を想い涙すると言う部分。私的にも「泣くかなあ」ってな感じがですが、色々考えて泣かしてみましたw

なんというか、気が強く、一見クールに見える女性ですが、それでも誰かを想って涙するという所に彼女の『人間臭さ』を出してみようかと思っただんですよw

まあ色々ありますが、気になった方、違和感を持った方も多いでしょうが、コメント頂けると嬉しいです。

鉄屋でした。

(3)

ビルダー基地を飛び立つてから4分。高度3千で接触予想空域に向かつて飛行していたヤン・ドク中尉は、コクピットの360度全天モニターを注視しながら短い舌打ちを飛ばした。

オーストラリアから北米の警備隊に転属となって1年と半年、テロの標的になるような重要施設の少ないこの地に移り日に2、3度決められた空域を哨戒飛行するのが主な任務であることに心底安心していたのだが、今日の緊急スクランブルで3年前のオーストラリアで起こった事件を思いだし嫌な気分になっていた。

出来ることなら安穩とした緩い任務を続け、テロ屋を気取ったチンピラまがいの連中を2、3人引っ張って大尉になることを望んでいたのだ。大尉になれば退役したときの退役給付金も増えるし、なんとと言っても政府公認の地球永住権が手に入る。俺も今年で32だ。大尉になって除隊し、いい女を見付けて一緒にになり、退役給付金を元手に店でも開こうなどと考え始めた矢先のことだった。

(何だか今日はいやな予感がする……)

ヤンはそう心の中で呟いた。MS乗りの最後は呆気ないものだ。宇宙空間での戦闘で被弾したときは悲惨だと、宇宙軍に入った士官学校時代の同期が言っていたのを聞いたことがあるが、地球の重力下でもそれほど変わりはないとヤンは思う。3年前のマフティー事件の折りに、次々と落とされていく友軍機を間近で見てヤンはつくづくそう思った。

被弾しジェネレーターが誘爆して爆散する者、SFSが破壊されスラスターを吹かすのが遅れて地面に叩き付けられる者、コクピットを撃ち抜かれ蒸発する者……

汎用兵器であるMSは戦場を選ばない。地上ならあるいは緊急脱出で助かるかもしれないが、空でのMS戦は被弾し行動不能に陥ったら確実な死が待っている。運良くパラで脱出できたとしても、乱

戦の中での友軍の救援など見込めるはずもない。飛び交う集束メガ粒子の拡散粒子で体を焼かれるか、パラシュートが燃えて墜ちるかのどちらかだ。

当時ヤンはまだ少尉で戦場に赴いた。SFSに乗った自機の周りを、同じようにSFSに乗った敵味方の機体が入り乱れて空中戦を繰り広げており、ヤンも必死になって自機を操り戦場を駆けていた。そして数回目のロックオン警報がコクピットに響き渡った瞬間、天地がひっくり返ったような衝撃が襲いかかり、ヤンは軽い脳しんとうを起こした状態でセンターコンソールの上から吐き出されたエアバッグに顔を埋めていた。

一瞬のパニックの後、機体損傷の警告表示で赤く染まったコンソールパネルを見て正気に戻り、全天モニターを見回すと、左半分のモニターパネルが死んでおり、有効視界が半分になっていた。機体状況を示すコンディション表示は3分の2が赤く染まり、左腕の表示が消えていた。それはミサイルの直撃だった。

散布された高濃度のミノフスキー粒子が満ちる空域で、精密誘導兵器など使用できないはずなのに自機がロックされミサイルを当てられた事を不思議がる余裕はその時のヤンには皆無だった。未だに何で被弾したのかさっぱり分からない。思えば他の遊軍機もミサイルにより被弾していたと記憶している。もしかしたら有線ミサイルだったのかもしれない。

その後ヤンは奇跡的にFSSが無事だったのと、自機とFSSを繋ぐコントロールデバイスが切断されてなかったものでどうにか帰還することが出来たのだが、基地に戻り被弾した自機の状況を外部から見て愕然とした。ミサイルの直撃を食らった左腕は肩からごっそり無くなっており、腹部の装甲はめくれ上がってジェネレーターが露出していたのだ。誘爆しなかったのが軌跡と言っていいほどの損傷に背筋が寒くなり、膝が小刻みに震えてその場にへたり込んだ。

一歩間違えれば確実に爆散して骨も残らなかっただろう。29年間生きてきた人生が、いや、自分という存在が一瞬にして消えて無

くなる。分子とか原子とか、そう言うレベルにまで分解されて、空気に溶けてしまうのだ。

あの時感じた恐怖は今でもヤンの胸に強く刻まれていた。MSパイロットは男なら誰でも一度は憧れる職業だ。格好良く敵機を撃墜し、戦場を颯爽と駆ける現代の騎士。若い女からもチャホヤされる存在。自分もそんな格好の良さに憧れてパイロットになったと言っても良い。だが、戦場で死に様は何も残らない。本当に何も残らないのだとその時初めて思った。

「ウィ…… ド01、間もな…… ア…… 接触…… か…… せよ」

基地との交信状態が急速に悪化してくる。空域に散布されたミノフスキー粒子の濃度が上がっている証拠だ。ヤンは額にじんわりと滲んだ湿りを、嫌な予感と一緒に拭いバイザーを降ろした。

「ウィザード01了解。全周囲警戒」

ヤンはそう言うって通信を切った。戦闘濃度に散布されたミノフスキー粒子のせいでもう殆ど聞こえていないであろう事は分かっていたが、ヤンはそう口に出すことで気持ちを集中させていたのである。「ウィザード01より各機へ、間もなくアンノン機と接触する。各員全周囲警戒を厳にせよ！」

ヤンは自機の左右に飛行する両機にそう指示すると眼前に映し出されたデジタル映像の景色に目を凝らした。すると両機から通信が入る。ミノフスキー粒子の濃度が高くてこれだけ近くの通信は不自由ではなかった。

「隊長、1時の方向、下方約10度！」

そう部下から通信が入りヤンはそのポイントに視線を移し目を凝らした。距離がある為まだ黒い点にしか見えないが移動しているのがわかった。

ヤンはすぐさまポイントをデジタルズームし、同時に手元のタッチパネルを操作してデータ照合に入った。一瞬でデータが検索され目標の識別が完了し対象のグラフィック映像と公式スペックが球形

モニターに表示された。

ズームされた映像に映っている2機のMSのうち1機は型式番号 Me02R『メッサー』と表示されたが、もう1機は『It can not identify outside data（データ 識別不能）』の文字が点滅している。

（データに無い…… なんだ？）

ヤンは嫌な予感がますます強くなるのを感じていた。未知の相手はそれだけで不利だと言うことを彼は3年前の経験で知っていた。自機であるFD-03グスタフ・カールは連邦地上部隊に配備されて4年になる。今まで乗ってきたどの機体よりも高性能であるが、採用から4年も経過していればスペックは知り尽くされているし、戦闘データは研究されていて当然だった。未知の敵との遭遇戦はそれだけで不利な立場になるのだ。

だが、距離が近づくにつれ、その形式不明機がずいぶん小さい機体である事が分かってきた。一緒に飛行しているメッサーと比較して15m前後の小型MSのようだった。その事でヤンは少しほっとした気分を味わったのだ。

3年前、アデレードを襲った集団『マフティー』のリーダー機と思われる機体が30m級の大型MSだった。MSの大きさが必ずしも性能に比例する訳では無いことは分かっているものの、『大きさ』はその存在感というか威圧感のような感覚を相手に与える物である。ましてやMSは人の形を模した物であり、相手の機体より自機が大きいと根拠のない安心感を持つのも無理のないことであった。

「ウィザード02は高度を取ってアンノンの頭を押さえる。03は俺と一緒に向こうと同じ高度を取って接近、直接俺が警告する。1機は小さいがデータに無い新型だ。どんな武装があるのかわからんから油断するなよ。各機、ファイヤーセイフティリリース！」

ヤンはそう両機に指示を出し、デジタル無線の周波数をオープンチャンネルにセットして相手に呼びかけを開始する。

「こちらは地球連邦北米方面軍ビルダー基地所属ヤン・ドク中尉だ。

接近中の所属不明機に告げる、貴官等の所属と行動目的を述べよ。
返答無き場合は撃墜する。繰り返す、接近中の所属不明機、所属と目的をあきらかにせよ、さもなくば貴官等を撃墜する！」

この濃密なミノフスキー粒子の中でも、距離を考えれば伝わって
るはずだ。しかし相手からの返答は無い。距離が近づき画面に表示
された機体の輪郭もハッキリとしてきた。ヤンはもう一度同じ警告
を繰り返し、自機にビームライフルを構えさせた。

火器を構えさせたと同時にOSが瞬時に火器管制モードに切り替
わりモニターにターゲットマーカが表示された。しかしヤンはラ
イフルをやや上方にズラしてマーカをターゲットから外した。

（威嚇射撃が通じる相手だと良いが……）

ヤンはそんなことを心の中で呟きながら唾を飲み込んだ。

「俺がとりあえず威嚇射撃をして奴らの出方を見る。ビビッて散開
したら03は白い小さい方を追え。俺は赤いメッサーを押さえる」

『了解！！』

ヤンの指示に03のパイロット、ミッキー准尉が答えた。去年部
隊に配属され自分の部下になった23歳の若いパイロットだった。

真面目で訓練時間が長いが当然実戦経験は無い。ヤンは3年前に目
標の赤いMSメッサーとの戦闘経験があり、かなり高機動のハイス
ペックな機体だと記憶にあり、ミッキーには荷が重いだろと判断
したので。

「いいかミッキー、さっきも言ったが見た目は小さいがデータに無
い機体だ。どんな武装なのかもわからん。手に負えないと判断した
ら高度を取れ。上にはデボシャが頭を押さえてる。ヤツと連携して
行動しろ」

デボシャ02のパイロットで階級は少尉だったが、前の部隊でア
フリカのゲリラ掃討作戦に参加しており若干の実戦経験があった。
歳は28でまだ若い、やはり実戦経験があるのでそこそこ冷静な
状況判断が出来る男だった。

「とりあえず2、3発撃つて奴らの頭をパス……！？」

ヤンはそこで言葉が詰まってしまった。正面のパネルに映し出される2機のアンノン機のうち、正体不明の白い小型のMSのシルエツトがヤンの記憶の中にある、ある機体の意匠に酷似していたからだった。

（あれは、あの機体は……っ!？）

赤いメッサーが自分たちと同じSFSに乗って飛行しているのに対し、その白い小型のMSは単独で飛行していた。メッサーと違い非常にスリムで細身のプロポーションを持つ機体で、外装の各部分のデザインがヤンの駆るグスタフ・カールに似て直線的なフォルムを基本としている。それが実際のスケールをより小さく見せている印象を受ける。

スキーのジャンプのような前傾姿勢で飛行している為、少し大きめのバックパックのような物を背中に装備しているのが確認できる。見たところ両の手に武器は所持していないようで、シールドも装備していないようだ。

だがそんなことよりもヤンを驚かせたのは、そのMSの頭部、人間で言う顔に当たる部分のフェイスマスクが、あるシリーズの機体に非常によく似ていたからだ。

『隊長、あ、あれガンダムですよねっ!？』

ミッキーのうわずった声がバイザーのインカムから響く。ヤンはその声を聞きながらモニターに映る機体を凝視していた。

丁度人間で言う所の額に当たる部分に配されたV型のブレードアンテナ。人の目を模した様な1対のデュアルセンサーカメラと、その下の口のように見えるマウスアーマー。

確かにそれは歴代の『ガンダム』を思わせる形状をしており、ヤンに否が応でも3年前の事を思い出させていた。

宇宙世紀の激動の戦乱期において、その名を冠したMSは何度も登場しており、初代のRX-78と呼ばれる機体の神掛かった撃墜スコア宜しく、各時代でも優秀な成績を収めているMSだった。

RXという型式番号の機体には、必ずと言っていいほどその時代

の『エース』と呼ばれるに相応しいパイロット達が搭乗し、『ガンダムタイプ』のカテゴリースコアを伸ばしてきた、ある種のブランドのようなフラッグMSである。

様々なバリエーションが存在し、『極秘開発が最も多いシリーズ』だとも言われるが、そのどれもが非常に高性能で優秀な機体であり、一部の軍関係者の間では『連邦の象徴』と言われる風潮さえ出来たほどだ。

友軍機であれば心強く、敵としてならあれほど恐ろしいMSは無い。その事は3年前に同じくRXシリーズと戦ったヤンは骨身にしみていたのである。あの時は友軍にも同じようなRX型が存在していた。だからまだ志気を保てたのかもしれないとまで思う。

そう……ガンダムという名を冠したMSは、そう言った兵士達のメンタルな部分にまで影響を与えてしまうほどの特別なMSなのだった。

ヤンは敵でないことを祈りながら、3回目の警告の後、自機のビームライフルの引き金を引いた。

集束メガ粒子のエネルギー光弾が頭上を行き過ぎ、バイヤは前方から接近する連邦のMSを見た。今のは明らかに威嚇射撃であることは分かっている。三回の警告の後の威嚇射撃だ。相手の隊長はなるべく穏便に事を済ませようとしているようだが、次は間違いなく照準を合わせてくるだろう。バイヤとしてもここで戦闘になることは避けたかったが、投降するわけにも行かなかった。出来れば隠密にビーストを受領して拠点に戻りたかったが、思いがけない状況悪化に舌打ちしてマルガットの乗るビーストを見た。するとビーストは顔を上げ、攻撃してきた相手を睨むような拳動を見せた。そして両肩にマウントされたギミックが作動し、ショルダーアーマーが展開して数枚のフィンがスルリと伸びたかと思うとビーストの機体が陽炎のように揺らいだ。

オオオオオン……

ニユートリノタービンが内圧を高め、超高速ロータリングシリンドーが唸りを上げる。それはまるで、猛獣の唸り声のように響きバイヤを戦慄させた。

「おいマルガット、待て、早まるんじゃないっ！」

バイヤは思わずそう叫んだ。するとノイズ混じりのマルガットの声が聞こえた。

『違う、俺は何も…… こ、コイツ勝手に…… うぐうつ——
！？』

マルガットの言葉の語尾が歪んだ瞬間、ビーストが空中を跳ねたそう、それは跳ねたときか言いようがない挙動だった。

ビーストは背面のメインスラスタを吹かし、長い噴射炎の尾を引きながら正面に迫る2機のグスタフ・カールに向かって突っ込んでいった。2機のグスタフ・カールのうち先頭の1機が手にしたビームライフルを立て続けに連射する。今度は先ほどの牽制射撃ではなく、明らかにターゲットであるビーストの撃墜を狙った射撃だった。

しかしビーストはその光弾を右へ左へと跳ねるように交わしていく。まるで空中に見えない地面があり、それを蹴りながらはね回る姿は野生動物のようだ。それはバイヤが知るどんなMSでも不可能な機動で、そのしなやかな動作はまさに生物のそれを連想させる。
(なんだ、あの動きは？ まるで生物じゃないかっ!?)

空中を蹴る度に、足や腰の装甲が割れて伸縮を繰り返す。それらが有機的に連動して生物のような動きを再現している様だが、内部のフレームの構造や関節がどうなっているのかさっぱり分からない。だがあくまでマシンであるMSが、あそこまでしなやかに動く物なのだろうか……

バイヤはその奇妙に現実離れた光景を見て息を飲んでいった。空中を蹴るように見えるのは、ふくらはぎにマウントされている外部ユニットの働きによる物だった。そのユニットからは両肩のフ

インをスケールダウンしたような羽が両方に3枚ずつ突き出ている。これは小型のフィールド発生装置である。3枚あるうちの外2枚で同種の、そしてそれらに挟まれた真ん中の1枚で対局力フィールドを発生させ瞬間的に反力磁場を形成し、その反発を利用して空間を『蹴つて』いるのである。

これはフィールド同士干渉作用を利用した斥力推進『ミノフスキー・クラフト』の応用技術である。本来『ミノフスキー・クラフト』を稼働させるには莫大な電力が必要とされ、従来は大型航空機や重力航行艦船などにしか装備出来なかったが、近年の技術レベルの飛躍的な向上により、電力サイクルの効率化と小型化に成功し簡易フィールドを発生させる小型のドライブが実用化され、MSにも試験的に実装されるようになった。

ただし小型と言ってもやはり装置そのものの大きさは大きく、搭載されるMSのサイズは大きくなってしまっていた。3年前の『マフティー事件』で組織のリーダーであるマフティー・エリンことハサウェイの搭乗したRX-105もやはり30m級のラージサイズMSだった。

だがビーストの足にマウントされた簡易フィールド発生ユニットは、本来飛行に必要な磁場を常に発生させるものではなく瞬間的に発生させる物である為、電力消費量も少なく装置自体もずっと小型に出来たのである。しかしそれでも瞬間的な電力は艦船に搭載されるメガ粒子砲並に消費するのだが、その電力確保を可能にしたのが新開発の『ニュートリノタービン』だった。

不可視の力場を蹴る反動とスラスターの噴射推力を併用し、他の航空兵器では考えられない機動でビーストはグスタフ・カールに接近していった。

その姿を追いながら射撃を繰り返していたグスタフ・カールのヤンは僚機に散開を指示し、2機のグスタフ・カールは二手に分かれた。ヤンは高度を上げるミッキーが追撃されるのを防ぐ為、ビーストの上方に射撃を集中させた。するとビーストはヤン機に狙いを定

め、一気に距離を詰めた。

目と鼻の先に迫ったビーストに向けライフルを射撃したヤンだったが、撃った瞬間ビーストが視界から消えた。ビーストは光弾を空中で一回転してかわし、ヤン機の頭上に躍り出ていた。ヤンは最後の射撃を避けられ、その動きに翻弄されながらもライフルを手放してビームサーベルを装備させると同時に光刃を展開させ頭上に突き入れた。

しかしビーストはその必殺の突きも身を捻り避けて、するりとした身のこなしでヤン機の肩に左足をかけた。次の瞬間、ドンっと言う衝撃がヤン機を襲い、その後に破壊音が続く。コクピットのヤンは内蔵が潰されるような激しい揺れに見舞われながら、視界の隅でノイズの混じる所々消えたパネルに映し出された、自機の右腕が千切れる映像を目撃していた。

ビーストはヤン機の右肩の足をかけ、それを踏み台にしてさらにその瞬間磁場を発生させたのだった。瞬間的に発生した磁場の反動でビームサーベルの集束粒子がフィールドと干渉して反発を起こして弾かれ、蹴り飛ばされた反動も作用して肩ごともげて関節が引きちぎれたのだった。

「お、俺を踏み台にしたっ!？」

ヤン機を蹴り飛ばし、自ら作り出した力場の反発力とスラスターク噴射で弾丸のようにミッキーを追うビーストを睨みながら、ヤンはそう叫んでいた。

(3) (後書き)

初めての人は初めまして。毎度私の拙作を読んで下さる方は毎度どうもです。

鉄屋でございます。

今回はMS戦闘の描写をしてみました。生涯で初めてロボット戦闘を書いてみたんですがいかがだったでしょうか？

今回は空中戦ですが、ビーストは驚異的な機動力を発揮して相手を翻弄しています。ですが一応断っておきますが、ビーストは単体では空が飛べません。ビーストには様々なオプションパーツが用意されており、今回は重力下での作戦を考慮し、現封時にあらかじめ飛行オプションユニットを装備された状態で送られてきております。(1)でバイヤが「フライトユニットを捨てて飛び移れ」と言ったのはそう言うことであります。ですのでRX-105のような第5世代MSではないですね。

それとビーストのシステムは、この時点では非常に不安定でマルガットを乗り手として認めておりません。ただマルガットの戦いのイメージをダイレクトに受信したインターフェイスが『ウィップ』を介さずにドライブを回しているのでコントロールが効かない状態です。まあ他にも色々要因はあるのですがひとまずはそう言った感じでwww

ツツコミどころ満載かもしれませんが、一人でも「面白いよ」と言ってもらえるととてもうれしいですので感想お待ちしておりますw
ではまた次回もお付き合い下されば嬉しい限りでございます。

鉄屋でした。

(4)

反発磁場の反力とニュートリノタービンの加圧エネルギーで噴射されるスラスタの恩恵を受けて、ビーストは離脱シャトル並みの上昇力でウィザード03、ミッキー機を追った。

下方から驚異的な上昇力で迫るビーストに、ミッキーは高度を取りながら自機のビームライフルを後方に連射した。しかしその光弾は空中をはね回るような機動を示すビーストを捉えることは叶わなかった。

「なんだよ、何なんだよア……イツっ!!」

必死に高々度まで逃げながら応戦するミッキーは、追いつがるビーストを映した後方警戒カメラの映像を見ながらそう毒づいた。SFSの推進スラスタに加え、自機のスラスタを吹かして文字通り全速力で上昇しているのに、ビーストはどんどん近づいてくる。急上昇で体に加わるGに奥歯を噛みしめて抵抗するミッキーは、圧力で白く染まり掛けてる視界の隅に、正面から迫る物体を捉えていた。会敵前に高度を取って待機していた02、デボシャ少尉の機体だ。

『ちょこまかとのっ！ カエル野郎っ!!』

通信機からそんなデボシャの声が流れ、デボシャ機はライフルを3点バーストモードで点射しながらビーストに向かって急降下していた。

「デボシャ少尉っ!!」

ミッキーは自機とすれ違うデボシャ機にそう叫んだ。ミッキーはそのまま機体を右に旋回させ大きく弧を描く。前身の全ての血液が体の左側に吸われていく様な感覚に耐えながらモニターに映るデボシャ機の背中を睨んだ。その瞬間、デボシャ機と追ってきたビーストがすれ違った。

『ガハっ!!』

ザリつと砂を噛むようなノイズ音と共に、バイザーのインカムからデボシャのぐもった声が響く。ビーストの後方に流れたデボシャ機が空中に破壊されたであろう破片をまき散らせている様子がモニターに映し出される。デボシャの乗ったグスタフ・カールは右半身が食いちぎられたように無惨な姿をさらし、やがてグラリと傾いてSFSから滑り落ちていった。

「デボシャ少尉——っ!？」

ミッキーは喉の血管が切れそうな声で叫んだ。そしてデボシャ機を引きちぎったビーストを見た。

ビーストは相変わらず空中を駆ける獣のように跳ねながらこちらに向かつてきていた。そしてその右手には、ピンク色に発光した3本の鉤爪の様な物が付いている。ミッキーはそれを見て恐らくデボシャ機を破壊した武器だろうと思った。

ビーストの両腕には『ビームフアング』と言う光学格闘用武器が装備されていた。ビームサーベルと同じ原理の光学兵器だが、一般のサーベル形状ではなく、粒子の集束を偏光させ鉤爪のような形で形成されていた。ビーストはデボシャ機をすれ違いざまにこの『ビームフアング』で文字通り引き裂いたのだった。

ビーストは再び自ら形成した磁場を蹴り、スラスターを最大噴射して一気にミッキー機に追いついた。

ミッキーはライフルに装填されたエネルギーパックの残量が尽きたので、腰にある予備パックを取り最装填しようとした瞬間、追いついたビーストにライフルの銃身を捕まれた。

モニター一杯に迫るビーストのフェイスマスクと、そのぼんやりと光る双眸に、ミッキーは得も言われぬ恐怖を感じた。

「あ、ああ、あああ……」

ミッキーは引きつった口から声を絞りだそうとしても上手く行かなかった。そしてその1対のデュアルセンサーカメラが一瞬明滅する。それは狩る獲物の善し悪しを吟味してほくそ笑む野獣のようだった。

「うわあああああ！！」

恐怖に支配された意識が声帯を震わせ絶叫となってコクピットに響く。ミッキーは自機にライフルを手放させると変わりにビームサーベルを引き抜かせてビーストに振るった。

集束粒子が周囲の大気を振るわせ鈍い音を立てる。ビーストはその光剣をスリリといなすと体を沈み込ませてビームフアングを屈いだ。ミッキーのグスタフ・カールは右足が根本から引き裂かれ千切れ飛んだ。

支えを無くしたグスタフ・カールがSFSの上で崩れる様に倒れ、バランスを崩したSFSが傾いた瞬間、ビーストは再び跳ね飛んで空中にその身を躍らせる。

一方足が引きちぎられ、ひっくり返った衝撃で、ミッキーはコクピットを襲う衝撃の中、意識をもろうとさせていた。

「ひつ、ひいひつ！」

カラカラに乾いた喉の奥で、乾いた悲鳴を飲み込んだ瞬間、今度は横殴りの衝撃が襲いヘルメットがヘッドガードに叩き付けられた。それと同時にモニターの左側が火花を散らしながらブラックアウトする。

ビーストは一端空中に飛び、SFSの上にひっくり返っていたミッキー機に再び襲いかかっていた。仰向けに倒れていた機体を横から蹴り飛ばし、機体をひっくり返してサーベルを握った右腕をビームフアングで刺し貫き、胴体に足をかけて力任せに引きちぎっていたのである。それは瀕死の獲物をオモチャにして遊ぶ獣の子供を連想させた。

強化チタニウムと複合セラミックで出来たMSのムーバルフレイムを片手で易々と引きちぎるビーストの膂力は驚愕に値する。一見華奢で細身の腕に見えるその内部には驚異的なパワーを秘めているのである。

ビーストは再び空中に飛び、そしてまたミッキー機に飛びかかり機体を破壊する。そんな事を繰り返すたびに、ミッキー機のどこか

のパーツ飛び、人の形を崩していく。それはもはや攻撃ではなく『解体』と言っていい行為だった。

コクピットのミッキーは何度も襲いかかる衝撃と、その度に火花を散らして死んでいくモニターに囲まれながら、恐怖で発狂寸前まで追いつめられていた。

顔を覆うバイザーは数回目の衝撃で木っ端微塵に割れ飛び、その破片が左目を貫き血と涙が頬を濡らす。数回の失禁で許容量をオーバーしたパイロット用のオムツから滲んだ尿が下半身を汚すが、胃から逆流した吐瀉物がそれを覆っていった。

発狂するか気絶してしまえばまだ楽だったかもしれない。だが横から食らった衝撃でアームレイカーを握っていた右手首が折れた痛みと、左目の眼球の痛みがミッキーの意識を縛って放さなかったのである。

一方、そんなビーストの様子をバイヤは声も出せずに魅入っていた。

（これは、戦闘じゃない。これは…… 獣の狩りだっ！）

勝負はもうとくに付いている。だがビーストはその『解体』を一向に止めようとはしなかった。いや、むしろそれは、その解体行為を楽しんでいるように見えた。

「マルガット！ もう良い止めろっ……！」

その『なぶり』を見ていたバイヤは、はっと我に振り返り戦友の名前を叫んだ。するとノイズ混じりのマルガットの声がインカムから流れてきた。

『俺じゃ、ない…… このマシン、コ、コントロールが、き、効かない……』

とぎれとぎれのマルガットの声だった。恐らく体を襲うGに必死に耐えているのだらう。あれだけのスピードで変幻自在な機動をしているのだ。内部にいるパイロットに掛かるGは尋常じゃないはずだった。

『だ、ダメだ…… もう、意識…… が……っ』

途絶した通信はマルガットが意識を失った合図だった。SFSの上で手足をもがれ、芋虫のような状態のミッキー機を踏みつけ、その引きちぎった頭部を手にしたまま、ビーストは機能を停止した。そしてそのままバランスを崩しSFSからグラリと落下していった。「マルガット！ おい、マルカット、しっかりしろっ！」

バイヤはそう叫びつつ、モニターの端に表示されたデジタル高度計を睨んだ。高度は2千メートルを切っていた。地上はもうすぐ下だった。

（間に合うか！？）

そう心の中で自分に問いかけながら、バイヤはオートで空中で旋回し始めたミッキー機の乗ったSFSを一瞥して機首を落下するビーストに向けスロットルを開放した。

到着カウンターを後にして空港内のロビーを母とミルの3人で歩いていたアムラスは、不意に得体の知れない恐怖のような物に襲われて足を止めた。

（な、なん、だ？ これ）

何かとてつもなく恐ろしい巨大な力で押し潰されるような恐怖。心臓の鼓動が高鳴り、額がじんわりと湿り気を帯びてくるのを感じた。小さな密閉された空間で、強大な力が中にいる自分を押しつぶそうとしている。しかしその意志は敵意ではない。何も抵抗できない自分を弄ぶような邪気のような物で、その事がさらに自分を戦慄させていた。

「どうしたのアム？ 顔が真っ青よ、気分でも悪いの？」

そんな不可思議な恐怖に襲われ足を止めたアムラスに気づいたベルトーチ力は、心配そうな顔でアムラスの顔を覗き込んだ。

とその瞬間、ロビーに緊急避難を告げるアナウンスが流れた。

「え？ なに、何なの？」

ミルがアナウンスを聞いて動揺したように誰とも言わずにそう聞いてきた。周りにいた人達も揃って動揺したようにザワつき始めた。「またテロじゃないのか!？」

そんな誰かの言葉に周囲に緊張が走る。ベルトーチカとミルも顔を見合わずとお互いに表情が緊張しているのが分かった。そしてその緊張のせいでアムラスは我に返った。

「急がないと、アムラス、本当に大丈夫？ 動けて？」

ベルトーチカはアムラスの頬に手を当ててそう聞いた。

「俺は大丈夫、昨日夜更かししすぎてちよつとクラツとしただけ。それより母さん、テロって…… マジで？」

アムラスはそう言っただけでベルトーチカを安心させてからそう聞いた。「わからないわ。こんな何の価値もない場所でテロなんて考えにくいけど…… とりあえずこういう時は最悪の場合を想定して行動するに限るわ。すぐに避難しましょう」

これまで数々の修羅場をくぐり抜けてきた経験がベルトーチカを冷静にさせていた。そんな母親をアムラスは素直に凄いなと思った。そのうち空港の係員が誘導を始め、空港内の客達が誘導にしたがって移動し始めたのでアムラス達もその列に加わり移動を始めた。

「MSの戦闘があつたって話だぜ？」

「そうなのか？ 俺は爆弾テロって聞いたけど……」

避難の為移動する客達の間で、そんな無責任な噂があちこちで拳がっていた。そのうわさを聞きながら、ミルは不安な表情でアムラスの腕にしがみついた。

「大丈夫だよミル、心配ない」

何の根拠もない言葉だったが、そんなアムラスの言葉にミルは少し緊張がほぐれた顔をして頷いた。

(墜ちるぞ、マルガットっ!!)

アムラスの頭の中に突然そんな声が響いた。いや、声というより

もつと漠然とした意識のような物だ。アムラスははつとして吹き抜けになつてゐるロビーの硝子の向こうに見える空を凝視する。

「ダメだ…… このままじゃ……」

空を凝視しながらアムラスはそう呟いていた。アムラスの腕を掴んでいたミルが驚いてアムラスを見た。

「アム……？」

「母さん、ダメだ。ここに居ちゃいけない！ このままじゃみんな死んでしまう！」

アムラスは真剣な顔でベルトーチカにそう訴える。ベルトーチカも驚いた様にアムラスを見つめた。

「アム、何を言つてゐるの？ だから今避難してゐるのよ？」

「違つんだ母さん、空から落ちてくる。こんな建物じゃ防ぎきれない！ すぐにこの建物から出ないと……！」

アムラスは初めて感じる感覚を相手にどう伝えて良いか分からなかった。何で自分でもそう思ふのか、何で分かるのか分からない。説明のしようがないのだった。

「アム、あなた……」

ベルトーチカは悲痛な表情を見せつつ訴えるアムラスを見つめながら、言おうとした言葉を飲み込んだ。そして同時にやはりこの子にはあの人の血が流れてゐるんだと思つた。

「何が…… 落ちてくるの、アム？」

ベルトーチカは慎重にアムラスにそう問いかけた。アムラスはあえぐように目を泳がせ、もう一度空を見た。そこに小さな点が二つ合つた。

「破壊の意思…… 危険な邪気を宿した…… ケモノ……」
「ケモノ？」

ベルトーチカはそうオウム返しに聞き返し、アムラスが見つめる空を見上げた。そこには2つの人型があつた。その2つはもつれ合ひながらこちらに向かって落ちてくるようだった。

「モビルスーツ…… あれは？」

その2つの人型がどんどん大きくなっていく。

「ダメだ、ダメだよ！ もう間に合わないっ！！」

アムラスがそう言った瞬間、ベルトーチカも叫んだ。

「伏せてえっ！！」

「きやあああああっ！！」

ベルトーチカの声にミルの悲鳴が重なり、アムラスはとっさにミルの頭を抱え込んだ。次の瞬間、大地がひっくり返ったような衝撃と破壊音が轟き、列を作って歩いていた客達の絶叫がロビーに響き渡った。

天井を支えていた鉄骨の支柱は接合部のピンがはじけ飛んでバラバラと落下し、天井から壁まで覆っていた強化硝子が木っ端微塵に吹き飛び破片の雨を降らす。吹き抜けの2階から1階へ降りる通路は、そこを歩いていた数十人の客達を乗せながら下階へ落下し、辛うじてしがみついた人も上から墜ちてくる硝子と鉄骨の破片が当たりにバラバラと落下していく。悲鳴と怒号と呻き声が破壊音と相まって変わり果てたロビーを支配する中、アムラスはミルを抱え込んだまま、衝撃に煽られ床をゴロゴロ転がった。

「うっう……」

体中に走る痛みで思わず呻き声が漏れる。体の中で痛くないところを探すのが難しいほどだ。埃でうすくモヤが掛かった視界の中、アムラスは腕の中のミルを見た。ミルは目を閉じてぐったりとしていたが、胸が上下に動いているのを見てほっとした。どうやら気絶しているようだった。

アムラスは上体を起こしてざっとミルの体を眺める。所々汚れているのと、数力所擦り傷が有るぐらいで、特に目立った外傷は無いようだった。アムラスはミルの頬を数回叩いて呼びかけた。

「ミル、おいミル、しっかりするんだ！」

そう声を掛けると、ミルは少し呻きつつ目を開いた。一瞬視線が泳ぎ、アムラスの顔を認めるとか弱い呟きを吐いた。

「アム……」

「ミル！ 良かった…… どこか凄く痛い所は無いか？」

そうアムラスが声を掛けると、ミルはまだ揺れる瞳で周囲を見回した。

「至る所がひりひり痛いけど…… 骨折とかは、無いみたい……」

ミルのその答えに、アムラスは「良かった……」と深い息と安堵の言葉を吐きだした。そして不意にベルトーチカの事を思いだし、跳ねるように立ち上がった。

「母さんは…… 母さんっ！！」

そう叫びながら振り向いたアムラスは、眼前に広がった光景に息を飲んだ。そこはがれきの山と化したロビーが広がっていたからだ。つた。

「ああ…… あああああ……」

アムラスは呆然と立ちつくしながら、そのロビーの変わり果てた姿を見回した。それは今まで見たどんな風景よりも悲惨で、非生産的で、何より理不尽な光景だった。

幾重にも折り重なったガレキと折れ曲がった鉄骨。そしてそこから見え隠れする人の手や足。動かなくなった人の上に、幾重にも重なる人。かつて人だった事が信じられない程損壊した遺体の数々。その上に細かく砕かれた強化硝子の破片と埃が降り積もっていた。
(なんだ、なんだよこれ……っ！？)

所々で拳がる呻き声、未だに崩れ落ちる建物の破片が転がる音、バチバチと火花を散らす電気配線のショート音……

その凄惨な地獄絵図のような風景に、アムラスは震えながら生唾を飲み込んだ。そして折り重なったガレキの向こうに、仰向けになつて横たわる白いMSの姿を見た。その人の顔を模したようなフェイスマスクには見覚えがあった。

(あれが、墜ちてきたのか…… あ、モビルスーツが)
立ちつくしてそのMSの顔を見上げるアムラスにミルが声を掛けた。

「アム…… あれが、墜ちてきたの……？」

背後で自分のジャケットを掴みながら、ミルは震える声でアムラスにそう聞いた。その時アムラスは我に返った。

（そうだ、母さんを――）

「母さんっ！ 母さあ――んっ！！」

左手でミルの手を引きながら、アムラスは声の限りにそう叫んだ。「返事をしてくれ、母さんっ！ お願いだから返事をしてくれよおっ！！」

アムラスが叫び始めると、ミルも大きな声で「おばさまぁー！！」と叫んだ。そして2人が少し移動しながら叫んでいると、右手のガレキの方から細かい声が掛かった。

「アム…… ラス……」

アムラスの鼓膜に確かに母の声を運んできた。

「母さん、母さんっ！！」

アムラスはそう叫びながら声のする方へ移動した。そして崩れた階段とおぼしきガレキの下にベルトーチ力の姿を見付けた。アムラスはその前で崩れるようにしゃがみ込んだ。

「ああ…… 母さん……」

アムラスは「ミル、そっち」とガレキに手を掛けてミルに言った。ミルはすぐさまベルトーチ力の上に覆い被さったコンクリートの塊の端を持って力を込めた。しかしその破片はびくともしなかった。

「母さん、待ってて、今誰か男の人を連れてくるから……」

そう言っただけ立ち上がるようにするアムラスの腕を、ベルトーチ力は唯一自由になる左手で掴んだ。

「無理よ…… これを、どかせても…… 私は、助からないわ。あなた達が、無事で良かった……」

ベルトーチ力は顔を歪ませながらそうアムラスに告げた。

「そんなこと言っちゃダメだ！ そんなことあるわけじゃないじゃないか！！ 母さんに限ってそんな……」

そうベルトーチ力の言葉を否定するアムラスの目から涙が溢れた。「わかるわ…… だって、お腹から、下が…… 潰れちゃってるん、

だもの…… 私は、もう、長くは、ない……」

「止めてくれよ母さん、そんなこと無い！ そんなことは絶対になり……！」

アムラスは涙を流しながら首を振って母の言葉を否定する。傍らでその様子を見ていたミルも口元を押さえ嗚咽を漏らしていた。

「母さんはいつぱい戦争を経験してきたんだろ？ でも死ななかつた。今度だつて大丈夫さ…… だから、だからそんなこと……」

ベルトーチカの左手を握りしめながら、アムラスは何度も首を振る。そんなアムラスをベルトーチカは優しい目で見守っていた。

「泣かないで、アムラス。私は、あなたが、いたから…… 今日まで、生きて、これたの、よ…… 私は、あの人の…… 子である、あなたがいたから……」

そう言つてベルトーチカは左手を放し、変わりにアムラスの涙に濡れた顔を優しく撫でた。

「アムは、勘がいいから気付いて、居るでしょうけど…… イラムは、本当のお父さんじゃ…… ないわ。私は、アムがあの人のように、苦しんだりする、のを…… あの人のような…… 辛い人生を、歩んで欲しくなくて……」

そこでベルトーチカは咳き込んだ。形のいい唇の端から、一筋の血が流れ落ちた。アムラスはそれを震える手でふき取った。

「人の、可能性を…… 体現し続けなければならなかつた、あの人の苦悩…… でもあなたは、あの人じゃ…… ない。あなたの人生は、あの人の、様にならないかもしれない…… から。」

私は、あの人を、今でも…… 愛しているわ。あなたと同じくらい。私は、出来る…… 事なら、あの人の、側で…… ずっと、あの人を見ていたかつたの。戦争の、中でしか…… 輝けない、のなら…… それでもいい。だつて私は…… 輝いてるあの人が…… 好きだつた…… から」

そこでまた咳き込み、ベルトーチカは大きく息を吐いた。

「悩んだすえ、あの人は、もう一人の…… 彼とは、別の道を選択

した。あの人は、腐敗を知り、つつも…… 人類の可能性にかけた。一人の、パイロットとして…… 最後まで、その優しさで、誰かを救える…… と信じて。人の意志の力が…… やがて世界を、変えてくれると…… その意志はアム…… あなたに、も、ちゃんと…… 受け継がれて…… いるって…… 私は…… そう信じて、るわ」

ベルトーチカの震える手を握りしめ、アムラスは何度も頷いていた。

「もう…… もう良いから、全部判ったから…… だからもう喋らないで、母さん……」

そう涙ながらに訴えるアムラスにベルトーチカは優しく続ける。

「ねえアム？ 一つだけ…… 聞かせて欲しいの。私の…… 子供に生まれて、幸せだった？ いつも、家に居なく…… て、あまり、良い母親じゃ無かった…… から、母さん、自信無いの…… だけれど……」

ベルトーチカのその言葉に、アムラスは何度も頷いた。それを見たベルトーチカは安心したように薄く笑った。

「そう…… 良かった…… 安心、したわ」

ベルトーチカはそう言つて安堵のため息を漏らした。そしてもう一度アムラスの涙に濡れた顔を撫でた。

「そんな顔、しないでよアム…… 笑つてよ…… 久しぶりに、会えたんだもの…… あなたの笑った顔が、見たい…… わ」

そう言つベルトーチカの手に自分の手を重ね、アムラスは反対の袖で涙と鼻水を拭き取るとニツコリと微笑んだ。口元を振るわせながらも、満面の笑顔をベルトーチカに見せたのだった。

「ああ…… やっぱり笑った顔が…… あの人に、そっくり……」
そう言つて目をつぶったベルトーチカの目尻から大粒の涙がこぼれて雫の筋を作った。

とその時、再び地面が揺れアムラスは驚いて振り返った。ガレキの向こうの割れた硝子の向こうに赤いMSが着地し、その向こうに

青い連邦軍とおぼしきMSがビームライフルを構えていた。そしてその連邦軍機は赤いMSめがけて発砲したのだ。

その光弾は赤いMSの脇をかすめ、ひん曲がった鉄骨の先端を蒸発させガレキの積もったロビーに赤い火花の雨を降らした。

「空港があるのにライフルを撃つなんてっ!!」

アムラスはそう吐き捨てるように言った。するとベルトーチカはアムラスの腕を引っ張った。

「アム、もうすぐ、ここは…… 戦場になるわ。あの、白いMSは、ガンダム…… よ。連邦軍の、機体じゃ無い…… みたいだから、連邦軍は…… 無理しても、手に、入れようと、する…… はずよ。すぐに…… ここから離れるの。わか…… るわね?」

「ダメだ、ダメだよ母さん! 母さんを置いてなんていけるわけないじゃないか!!」

するとベルトーチカはアムラスの腕を掴んだ手に力を込めた。

「行きなさい、アムラス。ミルも、いるのよ? このままじゃ、みんな、やられてしまう、じゃない。私はもう、動けないし、どのみち…… 助からない。お願い、よ…… 行つて、お願いだから、生き延びて…… あなたは、こんなところで、死んじゃダメな人…… なのよ」

するとまた衝撃が伝わり、バラバラと崩れ落ちる硝子の破片がアムラス達の周りに降り注いだ。そして周囲にはビーム粒子特有のオゾン臭が立ちこめる。

墜落した白いMSの側でシールドを構える赤いMSに連邦軍のMSがビームライフルで攻撃しているのだった。

「アム…… あなたが存在が、やがて、色々な人に、影響を与えるはず…… 時にはそれに翻弄され、苦しんだり、悩んだり、すると思う。でも、あなたは強い子。そして、とても優しい子…… その強い精神と、優しさは、この理不尽な世界、で、きつとあなたの強い、武器になるわ。」

ニュータイプの、力は、戦争の道具なんかじゃない。誰かを救い

たいという、強い意志と、優しさが、人を、新しい、段階へ導く鍵…… あなた達の未来は、可能性に、満ちてるの…… だからアム、その可能性を潰さないで…… 私と、あの人が残した希望を、私たちが出会えた奇跡の種を…… 私は、こんなところで失いたくないの……」

ベルトーチカはそこで大きく息を吐いた。その顔には明らかな死相が表れ始めている。それはアムラスにも分かっていたが、それを認めたくない感情で一杯だった。

「人は、無くなりはいないわ…… 居なくなっても、決して、消え去りはしない…… 世界に溶けて混ざり合うの。あの人のように…… 私は、いつも、側にいるわ…… アムもきつと私を感じる…… 行きなさいアムラス。私が溶けた世界を…… 宇宙を覆う星々の中を…… 流星のように、駆け抜けて……」

ベルトーチカはそこまで言うのと左手を放し、最後の力を振り絞ってアムラスを突き放した。アムラスは嗚咽をこぼしながらヨロヨロと立ち上がった。

「わかったよ…… 母さん。うう…… つ、俺、行くよ…… ゴメンな、母さん、こんな所に置いて、行くけどお…… ううつ」

泣きながら、齒を食いしばってそう言って自分を見下ろすアムラスに、ベルトーチカも泣きながら何度も頷いた。

「愛しているわ…… アムラス」

その言葉に力強く頷き、アムラスは泣いているミルの手を取り振り向くと、ベルトーチカに背を向けて歩き出した。空いた手で何度も涙を拭いながらも、振り向かずに歩くアムラスの背中を、ベルトーチカは薄れゆく視界の中で見守り続けていた。するとそのアムラスの後ろ姿が、かつての想い人の姿に見え、ベルトーチカは涙を流しながら微笑した。

（なかなか踏ん切りが突かない所も、あなたによく似ているわ…… 初めはいつも誰かに背中を押して貰わないとダメだったわね）

そうだったかな……

ベルトーチ力の耳にそんな声が聞こえた。

（そうよ、私が焚きつけないと直ぐに色々溜め込んで考え込んで考えていたでしょう？ インテリジェンスさは認めるけど、抱え込むのは良くないわ）

耳が痛いな。君はいつもそうやって僕を責めるな。

（違うわ。導いてあげてるんでしょう。優柔不断な誰かさんが道に迷わないようにって）

そう言う事にしておこう。あの子も迷うのかな？

（でしょうね、だってあなたの子だもの…… でも、きっと間違わないわ。だって……）

だって…… なんだい？

（私たちの子供だもの……）

ベルトーチ力はそう言うて傍らの優しい笑顔を見た。久しぶりに見るその顔はあの頃と少しも変わらない包み込むような笑顔だった。「私、あなたとの約束を守れて？」

ガレキの下でベルトーチ力はそう声に出して言った。もう殆ど視界が無くなっていたが、ベルトーチ力は少しも不安を感じていなかった。

ああ、良くやったね、ありがとう……

「そう…… 良かった…… 私は今、凄く幸せよ……」

崩れかけた天井に向かって伸ばされたベルトーチ力の左手は、その言葉が終わると同時に、崩れるように落ちていった。その瞬間、42年の彼女の人生は幕を閉じた。

波瀾万丈と言って差し支えない時代を生きた彼女だったが、最後の死に顔はとても安らかで、そして幸せに満ちた優しい笑顔だった。

(4) (後書き)

初めての人は初めまして。毎度私の拙作を読んで下さる方は毎度どうもです。

鉄屋でございます。

さて今回はMS戦に引き続き、ベルトーチ力の最後です。ベルトーチ力ファンの方、勝手に殺してスミマセン(汗っ)

ジャーナリストとして活発に動く彼女ですが、母親としての彼女を書いてみようと思いついたんですが、あまりその趣旨を上手く表現できてない様な悪寒が……(オイ！)

いかがだったでしょうか？

今回で一番苦労したのはアムラスとこのベルトーチ力の別れさせ方です。色々考えたのですが、どう考えてもアム君がこの場所から離れないイメージしか湧いてきませんでした。自分で書いてて「このマザコンが、さっさと行け！」とか突っ込んでみたりwww

結局引つ張りすぎて、どことなく中弛みのようになってしまいました……ウーン

ホント勝手な解釈&妄想100%でぶっ飛ばしてますが、原作キャラの設定内容などは軽くスルーしてくださいね。一応原作を考えて書いてますが、殆ど私の想像ですからw

では、今回も誰か一人でも「面白かったよ」と言ってくれる人がいることを願って……

鉄屋でした。

(5)

マルガットは墜落したビーストのコクピットで目を覚ました。あの程度体にかかるGを軽減してくれるパイロット用ノーマルスーツのはずだが、体中のいたるところがずきずきと痛んだ。特に右腕の肘から下の部分の痛みが酷かった。

数回右手で握り拳を作ろうと力を込めたが、脳天まで響くような激痛が走りマルガットは呻いた。

(こりゃあ恐らく折れてるな……)

そう判断して左手でシートの後ろにあるダッシュボードから救急医療キットを出そうとしたが、手をつ込んでからそこが空っぽだった事に舌打ちした。

ビーストは正規の企画MSではないばかりか、実験機に近い。開発ラボからの厳封直送で送り出されたばかりの機体で、受け取って直ぐに現地改修される予定だったのだ。本来どんなMSにも標準装備されるはずの生命維持装置や応急医療キットなどの付属品は一切装備されていないのも無理のないことである。

マルガットは何も映しだしていない全天モニターを見回し、続いてセンターコンソールを操作して通信機のスイッチを入れた。完全に機能を停止しているビーストのシステムだが、予備電源に切り替わっているので通信装置は問題なく起動した。

「バイヤ、聞こえるか？　こちらマルガット。バイヤ、応答願う」

バイザー内のインカムから発せられる電波をコクピット内に配された受信機が拾い、増幅して機外に発信するアップ・オン方式の無線で、今ほどのMSにも採用されている。

するとインカムからバイヤの声が聞こえてきた。

『マルガット無事か？』

「そうでもない……　さっきの衝撃で右手を折ってしまった。操縦は無理だ」

マルガットは左手で体を固定していたシートのアタッチメントを外しながらそう答えた。

『仕方ない、ビーストは破壊して早く離脱しよう。ミノフスキー粒子の影響で航空レーダーが役に立たないからわかんが、さっきの3機のレーザー通信がロストしてるんだ。もう増援が出てるだろう。囲まれたら抜け出せる可能性は無くなる』

その通信を聞いている間に、機体の外からドンっと言う振動が伝わってきた。恐らくバイヤのメッサーが近くに着地したのだろう。SFSはオートで上空を旋回させているに違いない。

「了解だ、今ハッチを開ける」

マルガットはそう言っただけでハッチのオープナースイッチを押した。すると正面のモニターパネルが上下に展開し4重構造のコクピットハッチが開いた。マルガットは左手で痛みが走る右手を支えながらシートを降り、ハッチから外に出た。

外に出たと同時に微かにヒビの入ったバイザーを上げると、乾いた風がマルガットの鼻の頭を冷やした。

マルガットは周囲を見回し、空港のターミナルビルに突っ込んだビーストと崩れた建物を見て舌打ちした。

（クソっ、どれだけ被害を出してしまったんだ、チクショウ）

その光景を見ながら、マルガットは心の中で呟いた。コントロールが効かなかったとはいえ、自分が乗っていたことに変わりはない。この一件で出た被害者達は全て自分の責任だ。マルガットはそう思い罪悪感に苛まれていた。

するとマルガットの前に、バイヤが操るメッサーの手が差し出された。顔を上げるとメッサーはコクピットハッチを開き、内部のバイヤが叫んだ。

「感傷に浸るのは後だマルガット。早く乗ってくれ、敵が来た」

そう言うバイヤの言葉にマルガットがそらを見上げると、暗くならかけている東の空に3つの機影が見えた。ビルダー基地から発進した増援のMS部隊だった。マルガットはまた舌打ちしてそそくさ

とメッサーの手に乗った。

「ビーストの破壊はどうする？」

「とりあえずそこから引きずり出す。まだターミナルに人が居るだろう。ここで破壊は出来ない」

バイヤはそう言いながらマルガットをコクピットハッチまで運んだ。マルガットは痛む右手を庇いながらハッチに潜り込んだ。

「メッサーのスラスタ―推力なら、ビーストを担いだままジャンプが可能だ。西側の滑走路まで行って、ライフルで撃つ」

「肩の後ろのタービンと首の下のもーター。それにシステムがあるコクピットだ。腰の融合炉は当てるなよ」

マルガットはバイヤの座るシートの後ろで簡易補助シートを展開しながらバイヤにそう説明する。

「分かてる、そんなことよりさつさとシートに座ってくれ」

バイヤがそう言った瞬間、機体に振動が掛かりマルガットはバランスを崩しながらシートにもたれ掛かった。SFSに乗った連邦のグスタフ・カールが上空からビームライフルを撃ったようで、メッサーのシールドにかすったようだった。

「こんな場所でライフルを使うか、馬鹿どもがっ！！」

バイヤは尚も点射してくるグスタフ・カールにそう吐き捨てるように怒鳴っていた。

ベルトーチカと別れたアムラスはミルを伴ってガレキが積もったロビーを必死に這い回っていた。涙はもう止まっていたが、思い出すとまた溢れる事を知っていたアムラスは、なるべく母の事は考えないように努めていた。

自分は母の希望なのだ。『生き延びて』と言った母の最後の願い。それを潰す訳にはいかない。必ずミルとこのふざけた状況から抜け出して生還する。その事だけを考えていたのである。

埃の舞う視界の中で、アムラスは非常口と書いてある表示を見付けた。ドアは半壊していたがどうにか人間はくぐれそうだ。現に何

人かの人達がそこから這い出ようとしていた。それを見てアムラスも非常口に向かって進もうとした。だがその瞬間、青白い光が目の前を走り、轟音と共にその非常口が蒸発した。連邦軍のMSが放ったビームライフルだった。

「きゃああああ！！」

傍らのミルが悲鳴を上げ、アムラスはミルに覆い被さるようにして床に伏せた。背中が火に炙られるように熱く、同時に独特のオゾン臭が鼻を突いた。

アムラスは恐る恐る振り返り、自分たちが行こうとしていた非常口を見やった。非常口のドアは跡形もなく蒸発し、周りのコンクリートが高熱に炙られ溶けていた。そこにいたであろう数人の人間の姿など影も形も無く、そこに人が居たという痕跡は何一つ残されてはいなかったのである。

（こんなの…… こんなのって……っ！）

アムラスはその理不尽な光景に強い怒りを憶えた。何十年も積み重ねた人の人生を一瞬にして無かったことにしてしまう理不尽な暴力。自分が死んでしまったことにすら気が付かないほどの一瞬で存在が失われる。

（こんな事が許される世界を俺は認めない。人の死が、こんなに簡単で良いはずがない！！）

「こんなの、あつてたまるかよっ！」

アムラスはゆっくりと立ち上がり、崩れた硝子の向こうに見える連邦軍のMSと赤いMSを睨んだ。そしてそのまま視線を横たわる白いMSに向けた。

心臓がドクンと大きな音をたてて跳ねた。

自分がいかに馬鹿げたことを考えているかは分かっているつもりだった。でも、抑えられない怒りが自分の中で沸き上がっているのを自覚していた。

母は言った。自分の父親は、人の意志がやがてこの理不尽な世界を変えると信じて戦った。人の優しさが誰かを救うと信じていた。

母もそれを信じたのだと……

母と、母が愛した人が信じた未来の世界が、こんなにも理不尽で良いわけがない！！

「ミル、立って」

アムラスはそう言っただけミルを立てせると、その手を引いて来た道を引き返す。

「アム、どうするの？」

そう聞くミルにアムラスは横たわる白いMSを指さした。

「あの白いMSが開けた穴から外に出る。他にもう出口は無い」

「そんな無理よ！ もしあのMSが動いたら潰されちゃうわ！」

ミルはそう言っただけ足を止め首を振った。

「このままここにいると同じだ。この建物はもう長くは保たないよ。なら、少しでも可能性がある方法をやってみるんだ。あのモビルス

ーツは機能が停止してる。その隙に脇を通り抜ければ外に出られる」

「でも外はMSが戦闘してるのよ。巻き込まれちゃうわ！」

「ここにいたら崩れてくるガレキの下敷きになるか、今みたいにビームで蒸発しちゃうんだぞ！」

アムラスは震えるミルの両肩を持ってそう言いながら揺すった。

「母さんは…… 母さんは俺達に生き延びろって言ったんだ。母さんとの最後の約束なんだ。だから……」

アムラスはそこで言葉を詰まらせた。ベルトーチカの最後の笑顔が頭をよぎり、涙が滲むのを堪えた。そんなアムラスの姿を見て、

ミルは頷いた。

「わかったわ…… 私も…… 頑張ってみる」

それから2人は横たわるビーストの脇のガレキを避けながら歩いた。足場の不安定な場所で、ミルは何度も転びそうになり、その度にアムラスが支えながら歩いた。

そして2人はようやくターミナルビルの外に出た。滑走路から吹く乾いた風が、汗が滲んだ体には少々肌寒く感じられた。

すると再びビームライフルの光弾が飛来し、直ぐ横にいた赤いM

Sの脇をかすめてビルに直撃した。薄暗くなりかけていた周囲にビームの光がカメラのフラッシュのように煌めき、耳が痛くなるような破壊音が響き渡った。

「いやあああっ!!」

ミルが叫んだ拍子に足をもつれさせ、アスファルトの上で横転する。その拍子にアムラスもつんのめってバランスを崩した。

「ミルっ!!」

そう叫んだ瞬間、再び飛来したビームライフルの光弾がビーストのすぐ脇に直撃して、ビルの鉄骨が吹っ飛びそのまま落ちてきた。アムラスは倒れたミルの上に覆い被さりながら、死を覚悟した。

（母さんゴメン！ 悔しいけどもうダメだっ!!）

そう心の中で母に詫び、体を硬直させた。だが、いつまで経っても鉄骨は振っては来なかった。アムラスは恐る恐る顔を上げ頭上を見た。

するとそこに、見慣れない金属の物体があり、アムラスの視界を塞いでいた。

（なん…… だよ……？）

そう心の中で呟きながら視線を移動すると、横たわったビーストの顔がこちらを向き、その人間の目のようなデュアルセンサーカメラが仄かに緑色に光っていた。そして自分とミルの上にはビーストの手が覆い被さっていたのだった。

アムラスがその仄かに光るビーストの目を見ながらゆっくり立ち上がると、頭上を覆っていたビーストの手も、それに合わせてゆっくりと上がっていった。

「助けて、くれた……？」

アムラスは掠れた声でそう呟いた。するとビーストはそのまま右手を動かし、今度は手のひらを上にして、アムラスの前に差し出した状態で止まった。

「な、何なの？」

アムラスの後ろで立ち上がったミルが、アムラスの背中を掴みな

がら恐る恐るそう聞いた。

（乗れって事だよな、たぶん……）

アムラスは心の中でそう呟いた。その手のひらを一瞥し、そして再びビーストの目に視線を移す。

「これに乗れってことですかあっ！」

アムラスはビーストの中に居るであろうパイロットにむかってそう叫んだ。しかしビーストからは何の返答も返ってこなかった。一瞬間こえなかったのかと思ったが、よく見るとコクピットハッチが開いているように見える。アムラスは少し疑問に思いながらも、再び大きな声で叫んだ。

「僕たち、近くに住んでる者です。安全な場所に保護して欲しいんです!!」

やはりビーストからの返答は無かった。しかしビーストの手がずっと少し前に動いた。まるで早く乗れと催促しているようだった。

「よしミル、乗って」

アムラスは振り返りミルにそう言った。

「で、でもこれ…… 軍の機体じゃないんでしょう？ テロリストとかだったら連れてかれて人質にされちゃう」

ミルはそう言って身を引いた。アムラスはそんなミルの腕を引き、ビーストの手に足をかけた。

「ここにいるよりはマシだ。それに今さっき俺達を助けてくれた。酷い人なら俺達もうとつくに死んでる」

アムラスはそう言って「よっ」と言いながらビーストの手に乗った。そして渋るミルを引っ張り上げた。

「お願いします!!」

アムラスはミルが乗ったことを確認して、ビーストにそう言った。するとビーストはゆっくりと手を持ち上げ、開け放たれたコクピットハッチに向かって移動し始めた。アムラスとミルはビーストの指にしっかりと掴まり落ちないように体に力を入れた。

マルガットはバイヤのシートの裏から救急医療キットを出し、ノーマルスーツの袖のファスナーを開けて腫れ上がった右腕に固定用のプレート当て包帯を巻き付けていた。そしてそのまま腕を吊るスリングに首を通したところで、ふと足下のモニターに映るビーストを見て驚いた声を上げた。

「ビーストが動いてる!？」

「何だと!？」

前方の上空に旋回する連邦のMSに点射をしていたバイヤは、そんなマルガットの言葉に反応してビーストを見る。すると確かに動いている。そして手のひらには2人の人を乗せていた。

「民間人の子供……? 何だあの子供達は?」

マルガットはそれを見て、バイザーの通信スイッチを入れ「バイヤ、スピーカーだ」と言った。バイヤはコンソールを操作し、出力デバイスを外部スピーカー切り替えた。

「その民間人、そこで何をしてる。ビースト、操縦者は誰だ!？」
その言葉に、パネルに映し出された2人の子供はビククリしたような顔でこちらを見ていた。

「ねえアム、あっちの赤いMSって、このMSと仲間じゃないのかしら?」

片手で風に舞う髪の毛を押さえながらミルはアムラスにそう聞いた。

「ああ、俺もそう思ってたんだけど……」

アムラスは首を傾げてそう答えた。

『その2人、何をやってるんだと聞いている!』

再度そう呼びかけられるが、アムラスもミルも訳が分からず答えようがなかった。そうこうしてる間にも連邦のMSはライフルを連射してきており、赤いメッサーは応戦を余儀なくされていた。

「あっちの赤いMSは仲間じゃないん……!？」

空いたままのコクピットハッチに飛び込んだアムラスは、同時に

そう言いかけそのまま言葉を飲み込んだ。アムラスに続いてコクピットに入ったミルも言葉を失って、球状のモニターパネルに囲まれた中央のシートを凝視していた。

「そんな…… 誰も居ない……？」

アムラスがそう言った瞬間、ミルの背後でコクピットハッチが閉まり、続いて機体の外の背景が瞬時に球体のモニターに映し出された。そして……

搭乗確認。搭乗者は速やかにシートに着席、初期登録を行ってください

どこからともなくそんな女性の声が響き、ミルはアムラスの背中にしがみついた。

「誰です、どこにいるんです!？」

アムラスはミルを庇うようにしてそう言った。

私はこのビーストの機体管制補佐A I『ウィップ』、敵性目標接近、搭乗者は速やかにシートに着席、初期登録を行ってください
(A I? A Iだって? じゃあこのMSは今まで無人で動いていたのかよ!?)

アムラスは「まさか?」と思う考えを脳内で繰り返していた。

至近弾、基本回避運動。対ショック防御……

次の瞬間、機体がぐらりと揺れ、アムラスとミルは慌てて中央のシートにしがみついた。続いて外部の音を拾ったスピーカーから破壊音が響き、足下に振動が伝わってきた。連邦軍機から放たれたビームをビーストが回避したのである。

「こ、このMS、勝手に動いてるの?」

シートにしがみついたミルが震えた声でそう言った。

「そうみたいだ…… でも……」

(そんなこと、本当に出来るのか?)

アムラスは頭の中でそう自問し、シートにしがみついてコクピットを見回した。モニターパネルの照度が少し暗く見えるのは、恐らく予備電源のみで稼働しているせいだろう。

予備電源による回避運動には限界があります。搭乗者の速やかな初期登録を望みます

再びコクピット内に女性の声を模したAIのデジタル音声が響く。
(なんだかわからないけど、今は考えてる暇は無い。この状況から脱出するには何だっけって利用してやる)

アムラスはそう自分に言い聞かせ、シートに潜り込んだ。

搭乗者着席確認、登録シークエンス開始。搭乗者はアームレイカーに両手を置いてください

「アム…… 大丈夫なの？」

シートに座り込んだアムラスの脇から、ミルが心配そうに覗き込んだ。

「分からない。でも今はやるしかなさそうだ。ミル、シートのアームとパネルの隙間に気を付けて。足を挟まれないように」

アムラスがそう言った瞬間、アームレイカーに手を置いたアムラスの腕に、左右に開いていたカバーがアムラスの腕を包むように閉じ、同様に足や腰、そして肩から胸に掛けて同じようにカバーが閉じていった。

「アムっ!!」

その様子を見ていたミルが悲鳴のような声を上げた。するとまた先ほどから喋っている女性の声が再びしゃべり出した。

身体固定保護完了。搭乗者は氏名を述べてください

アムラスはその指示に従い自分の名前を言った。

言語識別…… 認識成功。バイタルコンディション、起動レベルをクリアー。脳波レベル、起動レベルをクリアー。エアフォームオペレーション、マニュアルオートからブレイクインターフェースへシフト開始

正面のモニターに意味の分からない単語がもの凄い処理速度で浮かんで消えていき、次々とプロセスが実行されていく。

マスター『アムラス・チェカ・イルマ』を搭乗者登録完了。システムオールグリーン

「大丈夫だよミル。全然痛いこともない」

アムはそう言ってミルを安心させた。

「それよりミル、動き出したらしっかり掴まっけていてね」

アムラスがそう言うのとAIの声がそれに反応したように再びしゃべり出す。

同乗者の身体保護要請——確認。補助シート展開。同乗者は速やかに補助シートに着席して下さい

その声と同時にアムラスの座るメインシートの後ろから、折り畳まれていた補助シートがパタパタと展開した。

速やかに着席を。ミス——

そこでAIの音声かとぎれた。ミルは反射的に名前を聞かれたんだと判断した。

「あ、あのミル・ジョスター・アカギです」

ミルは緊張して少しトーンの高い声でそう答えた。アムラスはそんなミルに「相手はAIだよ？」と声を掛けた。彼女の緊張をほぐす効果も考えた少し冗談めかした物言いだった。

「だ、だって……」

そんなアムラスの言葉にミルはシートに座りながら俯いた。

イエス、ミス『ミル・ジョスター・アカギ』をメモリーに記録。

補助シートの簡易固定保護カバーはレフトアームカバーのみオート。他は全てマニュアルです。レフトアームカバーのロック及びリリースのタイミングはこちらに。ミス『ミル』へ着席後速やかな固定保護カバーの装着を望みます

ミルはそのAIの指示に従い体のカバーを装着していった。そして最後にレフトアームカバーが自動で装着された。

同乗者の着席及び身体固定保護カバー装着確認。機体管制OSをノーマルからビーストドライブへ移行。ニュートリノタービン正常に加圧中。ロータリングモーター回転率30%から80%へ。『ビーストシステム』スタンバイ

アムラスの座るリニア式シートの正面、丁度股の間に配されたセ

ンターコンソールパネルに緑の文字が次々とスクロールされていく。そして全天モニターの正面に『BEAST SYSTEM』の大きな文字が青く浮かび上がった。

システムフルオープン。RXF-108BD タイプビースト
オールデバイスコンタクト

その瞬間、ビーストのフェイスマスクにあるディアルカメラが一瞬強く光を発した。そして両肩にマウントされたユニットが展開され、収納されていた3枚のフィンが鋭く突き出された。

オオオオオン……

ロータリングモーターの回転率が急速に上がり、両肩のフィンからニュートリノタービンの余剰圧力が吐き出される。

シートに座るアムラスは、その音がまるで獣の遠吠えのように聞こえ、どことなく不吉な物を感じ身震いした。

「コイツ、動くぞ……っ！」

コクピットがグラリと揺れ、全天モニターに映し出された周囲の風景がゆっくりと下がっていく。体に堆積していたガレキがバラバラと落下し、ビーストは比較的ゆっくりとした動作で立ち上がった。やはりそのしなやかな動作はMSと言うより、どこか生物を思わせる動きだった。

母との別れ、そして降りかかる理不尽な状況に流されながら、自分は今こうして見たことのないMSのシートに座っている……。アムラスは自分の体が上方へと移動していく映像を見ながら今朝起きてから自分に起こったことを思っていた。だが、今日という長い日がまだ終わらないことをアムラスは理解している。自分がこの状況を打破できるかなんて自信はない。だが、やるしかないんだと自分に言い聞かせ、アームレイカーを握る手に力を込めた。

この日この時を境に、彼の運命は大きくその色を変えることにな

る。それは偶然にも、かつて彼の本当の父親が受け入れざるを得な
かった運命に酷似しているのだが、当の本人は知る由もなかった。

(5) (後書き)

初めての人は初めまして。毎度私の拙作を読んで下さる方は毎度どうもです。

鉄屋でございます。

さて今回は主人公アムラスがビーストに乗り込みます。戦闘に巻き込まれ、否応なく搭乗というガンダムシリーズのいわば『お約束』な展開です。賛否両論あるでしょうが、これだけは崩したくなかつたんですよw

で、ビーストの登録シーケンスですが、色々悩みました。特に迷ったのがAIが喋ることと、無人で動くこと。いやもうMSじゃねえだろそれw はい、ごもつともです(マテコラ)

いやね、このお話を考えるにあたり、先にアムラスの『例のあの人の子供』つー少々大胆な設定が先行して出来上がりました、そっちでは色々考えがまとまったのですが、彼の駆るMSが全然浮かばなかったんです。考えてもどこか他のガンダムの『強化版』みたいになつてしまつて……(汗)で思いついたのがサーカスです。サーカスの『猛獣使い』w

ビーストはその名の通り『猛獣』ってイメージなんです。だから操縦すると言うより『飼い慣らす』って感じです。コントロールできるときは良いですが、間違えると逆に『食われる』と言つたイメージが根底にあります、そんなMSを書いてみたかったんですよ。最初は動物の形に変形させようかとも思つたんですが、それよりも外見はそのまま、中身が変わるみたいな……何か得体の知れない、計り知れない『魔性』みたいなものが現れる方がカッコイイかな? って安易な発送ですw

最初はMS自体が喋る事を考えてみたんです。「よしビースト、敵を撃てや!!」↓「オツケーマスター!」若しくは「行け!」↓「やだ!」みたいにw

でも相手は猛獣ですので言葉が分かったら猛獣じゃねえだろう……

とか思い、じゃあ機体管制のAIに喋らせてしまえって考えました。で、そのAIを介してMSの未知のOSとコンタクトを取る。

本当は人の手に余るぐらいの猛獣であると印象付ける為にある程度無人で勝手に動く…… こんな感じw

若干やつちまった感がありますが、またお付き合い頂けると嬉しく思います。

鉄屋でした。

(6)

ビーストの機体が立ち上がった事を確認したアムラスは正面モニターを見た。モニターには空港の滑走路と夕闇が訪れる空が映っており、その中にSFSに乗って上空を旋回する連邦軍の青いMSが3機確認できた。

とりあえず立ち上がったものの、アムラス自身どうやって操作したのかさっぱり分らない。ただ『立ち上がらなくては』と思ったから出来てしまったのである。

「君が動かしてるのか？」

アムラスはそうAIに聞いた。

いいえ、私は思考学習型戦略戦術AI。戦術立案、検証、予測演算、機体管制、火器管制等の総合管理及び搭乗者とビーストドライブの接続補佐をする物。搭乗者不在時の基本動作をドライブに働きかける事は可能ですが、ブレインインターフェース稼働中は動作プログラムの自立起動が自動的にオフになります

「ってことはつまり俺が動かしてると言うことになる？」

イエス

アムラスの質問にそう即答するAI『ウィップ』。だがアムラスはどうも釈然としない気持ちだった。何しろ生まれてこの方、モバイルスーツなんて学校の実習でプチ・モバイルスーツを少しいじったくらいで、フルサイズのモバイルスーツなど触ったこともないのだ。現に今こうしてビーストのシートに座っているが、操縦していると言う実感は皆無なのである。「でも俺はどうやって動かしているのか自分でも分からないんだぜ？」

このRXF-108BD、ビーストはブレインインターフェースを実装しており、全てのシステムはそれを前提に設計されています。よって従来のマニュアルオートの操作は殆ど必要ありません

「ブレイン…… インターフェース？」

アムラスはその聞き慣れない単語を呟いた。

搭乗者の脳から発せられる微弱な電気信号を受信し搭乗者の筋肉の運動をダイレクトに機体各部に伝達するシステムです。本機はメインフレームにPTB【Psychowave Transmission Bone：精神波伝達骨格】フレーム、関節にはハイパーニアジョイントを採用しており、搭乗者のイメージに限りなく近い動きを再現します。また、各部装甲は機体の動きに追従して開閉するセパレートフレキシブルアーマーを採用。これらを連動させることによってビーストは従来のMSの動作を上回るスムーズで有機的なムービングを実現しています

その説明と同時にパネルの右脇にビーストの3Dイメージが映し出され、ウィップの説明に準じて機体の各所が点滅していく。しかしアムラスはウィップから説明される単語の半分も理解できなかった。

「要するに、アムの考えたとおりに動くって事？」

後ろで話を聞いていたミルがウィップにそう聞いた。すると即座にイエスと返事が返ってきた。

（なるほど……とにかく俺が考えただけで動くってのは素人にはありがたい。何とか脱出できるかもしれない）

アムラスはそう考え、ふうつと息を吐き正面モニターを睨んだ。

それとマスターアムラス、私から一つ進言があります。機体管制及び戦闘に関係性の薄い事です、発言を許可して頂けますか？

急にウィップがそう自分に問いかけてきたのでアムラスは少々緊張した。こういう部分も本当に人間の様だと感じる。アムラスは「ああ、かまわないよ」と答えた。

今後、私のことは『君』等の人称代名詞ではなく『HA-RO【ハロ】』とお呼び下さい

アムラスはその言葉を聞いて少し可笑しくなり口元に笑みが浮かんだ。

「ハロ？ あのマスコットホビーの？」

ミルが首を傾げならそう聞いた。ハロという名前で最初に思い浮かぶのがミルの言ったそれである。ハロとは過去に起こった『一年戦争』の渦中で当時のホワイトベースに居たエースパイロットが独自に作ったマスケットロボットだったが、大戦中のホワイトベースの活躍もあつて戦後まもなく子供の玩具としてコピーされたそれらが販売されブームとなったのだ。今でも数代型が更新され販売されている。

私の基本プログラムを手がけた技術者モニカ・ミクニソン女史が付けた私のニックネームです。ミス『ミル』の言うとおり、マスケットホビー『ハロ』と同一名と記録にあり。モニカ技士がそれを意に命名したのは不明ですが、戦闘兵器の管制プログラムにホビーの名前を採用するのには彼女の『反相的思考』がある物と推測されます

MSの機体管制を司るAI。人工の人格をインストールされたプログラムのそれが、自分と呼ぶその呼び方に注文を付ける。その事が妙に人間くさく感じられ、アムラスは可笑しくなったのだ

「了解だよハロ。なら俺のことも『アム』で良いよ」

そう自然に言っていた。そしてそれと同時に、この『ウィップ』と言うAIが少し好きになりかけていたのだった。

了解。搭乗者『アムラス・チェカ・イルマ』に『アム』を追記。以後愛称『アム』にて対話形成。進言受理、感謝します、アム

その言葉と同時に再びモニターの正面がパツと明るく光り、続いて衝撃が伝わってくる。上空を旋回している連邦軍機からのビームライフルの狙撃だった。

「うわあっ！！」

機体に衝撃が走りコクピットが激しく揺れた。それと同時にアムラスとミルは揃って悲鳴を上げる。上空から放たれたビームライフルは直撃のはずだった。現にビーストには確実に光弾が当たっている。しかし衝撃は感じるのだが機体には全く損傷がなかった。

本機には重力下における立体高速機動、プリズム（PRISM）：

pseudo Repulsion interference
space is mobile【疑似斥力空間機動】）を行う為
のフィールドジェネレーターが各部に装備されており、それによ
りビームライフなどの粒子収束型フィールド兵器の攻撃を、エフイ
ールド同士の対消作用で一時的に無効にします
「えつとつまり…… このMSにはビームライフルは効かないって
こと？」

イエス—— ですがフィールド発生維持に時間的制約がありま
す。本機に搭載されているフィールドジェネレーターは本来プリ
ズム機動を行う為の物ですので、電力の供給量に限界があります。
連続形成は本機に搭載されているニュートリノタービンをフル稼働
させても5秒が限界です。またフィールドを連続形成させた場合、
機関冷却の為20秒以上のインターバルが必要になり、その間エフ
イールドが展開できません。当然プリズム機動も出来なくなります
のでご注意を。プリズム機動とは、別名『重力下アンバック』とも
言われ——

「あーハロ、ちょっと待った」

アムラスはそこでハロの説明を遮った。ハロの説明を聞いてもア
ムラスにはさっぱり判らなかつたからだ。

「俺は素人だ。エフィールドだの立体高速機動だの説明されても何
のことだか全然判らない。つまり『弾を弾くのには限界があるから
なるべく回避しろ』…… ってことだろ？」

そんなアムラスの言葉にハロの返答は少し間があつた。

—— イエス。『弾を弾くのには限界があるので極力回避を……』

…… 大まかではありますが概ねその通りですアム
アムラスはハロのその言葉に無言で頷いた。

（それだけ判ればいい。機体のシステムなんかは俺が知らなくても
良いことだ）

アムラスはそう心の中で結論付けた。アムラスにとってみれば、
ようはミルと2人でこの状況から脱すれば良いのである。軍事知識

やシステムの原理など必要ない。その効果だけを知っていれば事足りるのだった。

「ハロ、俺の声を側の赤いMSに伝える方法は？」

アムラスは先ほどこちらに向かつて質問してきた赤いMSにコンタクトを取るつもりだった。この白いMSとその赤いMSはたぶん同じ組織に属する機体だ。この2つがどうにかならない限り、ターミナルビルへの被害は増すばかりだ。

どんな人が乗っているのか判らないが、赤いMSも、この今自分が乗るMSをどうにかしたと考えているからこの場にいるのだという事はアムラスにも判っていた。

連邦だって馬鹿ではない。増援だって来るだろう。赤いMSのパイロットだって複数の敵機に囲まれるのは望む所じゃないはずだ。こちらが素直に動くことを示せば早々に離脱を計る可能性は高い。このまま離脱して連邦軍を巻き、どこか離れた場所で機体を返せば自分とミルを解放してくれるかもしれないと考えたのだ。

（この人達にだって損じゃないはずだ。幸いこのMSは普通のMSじゃないみたいだし、最悪向こうが理不尽なことを仕掛けて来そうなら、『機体を破壊する』とか言えば何とかなるだろう。やれるだけの事はやってみないと……）

アムラスはそんなことを考えていた。だが、アムラスは不思議な事にこの隣にいる赤いMSからは敵意みたいな物を感じなかった。何というか背中中的ターミナルビルを庇っているような気配を感じていたのだ。漠然とだが、まだ逃げ遅れている人を気遣う『意識』みたいな物を感じていたのである。コンタクトを取ろうと思ったのは、実のところそうした物を感じたからだだった。

コクピット内の音声を外部スピーカーに繋ぎました。そのまま話してください

ハロの言葉にアムラスは頷き、隣の赤いMSに喋りかけた。

「赤いMSの人、聞こえますか？　俺はこの白いMSに乗っている者です」

アムラスの声は外部スピーカーで機体外に響いた。

一方、呼びかけられた赤いMS、バイヤーの駆るメッサーはその声に反応してメインカメラをビーストに向けた。その声を聞いていたマルガットは連邦軍に牽制射撃を繰り返しているバイヤーの後ろで誰とも無しに呟いた。

「ずいぶん若い声だな…… さっきの男の方が？ まだ子供みたいだったか……」

モニターに映るビーストはもう完全に立ち上がっている。見ると両肩のユニットが展開しフィンが付きだしていた。それはニュートリノタービンと超高速ロータリングモーターが稼働している証拠で、ビーストシステムが正常に機能している事を意味している。

それに今さっきビームライフルの直撃を防いだ事から判断して、ファイールドジェネレーターも稼働させているのは間違いない。そもそもファイールドジェネレーターはビーストのサイズで稼働させるなら、ニュートリノタービンが稼働しないと電力が追いつかないはずである。

（間違いない、今シートに座ってる奴は、ビーストシステムを正常に作動させている……）

マルガットはそう結論を出し再びインカム越しにビーストに向かって叫んだ。

「君はさっき手に乗っていた少年だろう？ 操縦者と話したい！ 最起動してからこちらへの攻撃もない事から判断して連邦軍のパイロットではないだろうと判断したマルガットはビーストにそう要請した。

『操縦者…… いえ、僕がシートに座っています。このMSに乗り込んだとき、誰も乗っていなかったんです』

「なんだって!？」

マルガットはビーストからの通信を聞いて思わずそう声に出した。
「どういうんだ？」

通信を聞いていたメインシートに座るバイヤがマルガットにそう聞いた。

「わからん。ただビーストには非常に高度な判断が出来る高性能なAI『ウィップ』が搭載されている。パイロットが不在の状態でも基本動作ぐらい出来るのかもしれないが……」

現に先ほどシステムが勝手に戦闘して、瞬く間に3機のグスタフ・カールを撃墜したばかりだ。あの時マルガットは操縦したと言う意識は全くない。殺人的な機動をするビーストのコクピットの中で、意識をつなぎ止めておくだけで精一杯だったのだ。

（AIによる自動機体制御…… 無い話でもないが、なんでウィップはあの子供をコクピットに導いたのだ？）

マルガットはその点がどうしても合点がいかなかった。

すると再び機体が揺れ、マルガットは折れている腕でシートに収まった体を踏ん張り、激痛にぐもった呻きを漏らした。上空のグスタフ・カールが再び射撃し、バイヤが回避行動を取ったのだった。

「マルガット、幸い連邦の手に渡ったわけではないようだ。ここは彼にこの場から離脱するよう促そう。このままでは2機とも破壊されるか捕縛されるかのどちらかだっ！」

ビームマシンガンを点謝しつつ、自機に最小限の回避行動を取らせているバイヤの悲痛な訴えに「了解だ」と答えたマルガットは右腕の痛みに耐えながら再びビーストに呼びかけた。

「ビーストの搭乗者、ここにいると空港の被害がでくなりすぎる。我々は直ぐにでも離脱を計りたい。その機体をこの場から離脱させることは可能か？」

そのマルガットの問いにビーストは一瞬身構えるように体を引いた。

『出来る…… と思います。自信はないけどやるしかない。これとその赤いMSがこのままここにいたら空港の被害がどんどん大きくなってしまうって言うのはわかるつもりです』

マルガットはその声に意志の強さのような物を感じた。

「感謝する、こちらは上空にSFSを待機させている。そのビーストはフライトユニットが装備されているから単独で飛行が可能なんだが……」

「わかります。ハロが教えてくれるから……」

「ハロ？」

マルガットはそう言って首を傾げた。

『このMSのAIの名前です。彼女がそう呼んで欲しいと言っていました』

その言葉を聞いていたバイヤも怪訝な顔をマルガットに向けていた。

「何のことだ？」

そんなバイヤの言葉にマルガットも首を振った。

「俺もさっぱりわからん。だがどうやら彼はこちらに協力してくれるようだ。後はこの状況をどうやって切り抜けるかだが……」

そうマルガットが呟いた瞬間、コクピット内に警戒アラームが鳴り響いた。ギョツとして正面モニターを見たバイヤ叫ぶ。

「奴らミサイルを撃ちやがったっ!!」

バイヤは吐き捨てるようにそう言つとメッサーのビームマシンガンを乱射し光弾の弾幕を張った。バイヤのトリガーに連動し銃口からおびただしい数の光弾が吐き出され、全天モニターの右隅に表示された火器管制ウィンドウの残弾カウンターがせわしなく明滅している。

先ほどから繰り返した牽制射撃でエネルギーパック1個分を使い切り、リロードした弾倉が見る見る減っていく。

「クソっ、数が多い。防ぎきれない!!」

バイヤのメッサーが張った弾幕をすり抜けたミサイルがターミナルを直撃し、背後で轟音と共に火柱が上がった。ミサイルの爆発で辛うじて残っていた天井は木っ端微塵に吹っ飛び、付き立った鉄骨が熱で溶けていった。

「馬鹿どもが、こんな場所でミサイルまで使うなんて……っ!!」

マルガットはその光景を見ながら、齒ぎしりしつつそう罵った。

アムラスもまたマルガットと同じく、コクピットの全天モニターに映し出されたその光景を見て言葉を失っていた。

「ああ、なんて…… 事を……っ!？」

アムラスの脳裏に、先ほど母と別れることになったロビーの風景が蘇っていた。

（まだ怪我人や、逃げ遅れた人が居たはずだ。それなのに…… それなのにっ!）

母の遺体もまだあの中にあつた。だがそれ以上にその事がアムラスの怒りに火を付けたようだった。

ミサイルに搭載されていた弾頭のせいなのか、それとも何かの燃料に引火したせいなのかわからないが、屋根の崩れ落ちたターミナルビルから真つ黒い煙を伴った火柱が上がるのを見つめ、アムラスは怒りに肩を振るわせていた。

敵性目標、ミサイル第二波の発射を確認。迎撃準備

そこハ口の言葉に、アムラスは涙が滲んだ怒りの瞳でモニターを睨み叫んだ。

「ハ口！ 撃ち落とせるか!？」

イエス。アイ・ポイントシステムオープン。兵装、頭部60mmバルカンをチョイス。アム、目視にて飛来するミサイルを視認してください

すぐさま返ってきたハ口の言葉に反応し、アムラスは上空から飛来する銃数発のミサイルを睨む。すると目で見たミサイルの映像に次々と赤い照準マークが表示されていた。続いてビーストの頭部に内蔵されている2門のバルカン砲が火を噴き、吐き出される熱で赤く染まった実体弾が飛来するミサイルに殺到し、次々と迎撃していった。

上空で迎撃されたミサイルが爆発し、暗くなりかけた空が昼間のようになり明るく光る光景をモニターで見たラムラスは思わず「凄い…

…」と呟いていた。

迎撃成功。敵ミサイル12発の破壊を確認

淡々とした声で戦果を報告するハ口の声に我に返ったアムラスは、隣の赤いMSに向かって叫んだ。

「直ぐにここから離れないと！」

『了解、上の1機が頭の上をパスしたらジャンプする！』

即座に応答した赤いメッサーの言葉を聞き、アムラスは自分たちの頭上を通り過ぎていく連邦の機体を見た。

（よし、今だっ！！）

アムラスがそう考えた瞬間、ビーストは地面を蹴り、スラスタを焚いて空へとその身をジャンプさせた。続いてメッサーもスラスタを目一杯噴射させてその巨体を空中に踊らせるが、その動きのしなやかさはビーストの動きよりも数段鈍く感じられた。

フライトユニットオプション展開。重力下飛行モードへ移行

そのハ口の言葉と同時にビーストの背面に備え付けられたランドセルのような箱形のユニットが展開し、内部のジェットタービンが高速回転を始める。続いて推進剤に点火した2機のエンジンが力強い咆吼を上げ、それと同時にコクピットにジェット戦闘機並みのGが掛かった。

「うっつ！」

ビーストが加速した瞬間、アムラスとミルは同時に呻きを漏らした。しかしそれも一瞬のことで、Gから回復したアムラスは全天モニターに広がる光景に声を漏らした。

「凄い、空を飛んでる……」

敵性目標接近！

そんな光景に見とれたのもつかの間、すぐさまハ口の言葉が飛ぶ。見ると正面のパネルに旋回するSFSに乗ったグスタフ・カールの姿が見えた。

（あのMSが乗ってる飛行機だけを壊せないだろうか？）

ふとアムラスはそんなことを考えた。するとハ口の声がそれに答

える。ハロはブレインインターフェイスを通してアムラスの考えを受信しているのだった。

兵装、SMミサイルサイルを推奨。SMミサイルはアムの脳波によって目標を追尾します。ミノフスキー散布下でもワイヤレスで敵機を追尾可能です

「脳波って言ったって俺には……」

イメージしてください。相手の意識や動きをイメージすることによってSM兵装は機能します。アムの脳波レベルでは充分に使用可能です

そんなハロの言葉にアムラスは戸惑いながらも前方の青いグスタフ・カールを睨み、意識を集中させた。すると不意に頭の中に電流が走ったような感覚を感じた。

（これって……っ!？）

目標補足、SMミサイル1、2番射出

そう考えた瞬間、ハロの声が響きビーストの尻の部分に配されたアーマーの内側から小さな物体が2つこぼれ落ちたかと思うと、青白いプラスト光を発し、空中で跳ねるように前方に向かって飛んでいった。アムラスの思念を受信したその軌道は、ミサイルを回避しようとするグスタフ・カールに合わせジグザグに動き、アムラスの念じた通りグスタフ・カールの乗るSFSに直撃した。直撃した際に、SFSから身を投げ出したグスタフ・カールはゆっくりと降下していった。

するとアムラスの頭に、後方から接近する『敵意』の様な物が流れ込んできた。アムラスは反射的に後方警戒モニターを正面パネルの左上に表示させる。見ると2機のグスタフ・カールが迫っていた。それと同時に後方警戒アラームがコクピットに鳴り響いた。

「アムっ!」

「わかってるっ!」

悲鳴のようなミルの声にそう答え、アムラスは後方から迫る2機に意識を集中させると、再びビーストの尻から4発のSMミサイル

が放出され、後方のグスタフ・カールに飛んでいった。

目標補足、続いて3番から6番同時射出

アムラスが後方の2機を感じた瞬間にハ口の声が響き渡る。射出されたSMミサイルは回避行動に移るグスタフ・カールを追尾し、
またもアムラスの念じたとおり、正確にSFSに命中した。

SMミサイル全弾命中。敵性目標、追尾不能。周囲10km圏内に敵性目標無し。お見事です、アム

そんなハ口の言葉に、アムラスは「ふううつ」と深いため息を吐き、シートに身を沈めた。

「ありがとうハ口、君のおかげだよ」

アムラスはそうハ口に礼をいった。AIだとわかつてはいるが、その会話能力についてい人と同じように喋ってしまうのだった。すると先ほどの赤いメッサーがSFSに乗って左の方から近づいてきた。

『ビースト、聞こえるか?』

コクピット内に赤いメッサーからの通信音声 that 響いた。アムラスとミルに再び緊張が走る。

「はい…… 聞こえています」

アムラスは慎重にそう答えた。

『まずは我々に協力してくれたこと、感謝したい。ありがとう』

そんな相手の言葉に、一瞬緊張がほぐれてアムラスはほっとしながら「いえ……」と答えていた。

『それにしても…… 連邦軍のMS3機をあつという間に追尾不能にするなんて驚いた。君は一体何物なんだ?』

そんな相手の言葉に、アムラスはミルと目を合わせて返答に困ってしまった。

「何者って言われても…… ただの学生ですとしか言いようが無いです」

アムラスは困りながらそう返答した。

『ただの学生…… その言葉をまともに受け入れるには、我々は少

々想像力が足りないようだな……」

ため息混じりのその言葉には少し呆れ気味な響きが含まれていた。「嘘じゃありません。僕はハイスクールに通う学生です!」

変な疑惑を掛けられ、解放して貰えないなどと言う冗談は聞けない。アムラスはそう思い慌ててそう言い返した。

『その言葉が事実なら…… 君のような人間がニュータイプと言えるのだろうか……』

隣を飛ぶメッサーから発せられたその言葉には、若干の自嘲めいた感情が含まれているとアムラスは感じた。だがアムラスはそんなことよりも、彼の言った『ニュータイプ』と言う言葉に意識が持つて行かれていた。

(ニュータイプ…… 人の革新? この俺が?)

そう笑い飛ばそうとした刹那、母の最後の言葉が脳裏をよぎる。

あなたの存在がやがて色々な人に影響を与えるはず

あなたの持つ強い意志と優しさが、人を新しい段階へ導く鍵

そんな母の言葉が頭の中でぐるぐると繰り返し響いていた。

「ニュータイプ…… 新しい段階に進んだ人類の可能性……」

アムラスは星が出始めた暗い空を眺めながら、誰とも無くそう呟いていた。

第1章 エピローグ

机の上に置かれた数枚の電子書類に目を通していた時、不意に手元に置かれた端末から着信を告げるメロディーが鳴り、書類を置いてディスプレイに表示された相手先の番号と、同じく表示された名前を一瞥し、少し考えた後通話ボタンを押した。

この回線に直接通話を掛けてこれる相手はごくわずかだが、そのごくわずかな相手先リストの中でも極めて珍しい名前だったことが彼女にボタンを押させるのを躊躇させた。

『久しぶりだな』

相手は名乗らずに、まずそう言った。

「ええ、ほんとうにお久しぶりね、お元気だった、カイ？」

そう言ってセイラ・マスはモニターに向かって薄い微笑を投げた。その何気ない微笑にも、どこか『育ちの良さ』が感じられるのは、彼女の出自を知るものなら当然と思うだろう。モニターに映る40代半ばの銀髪の男もまた、彼女の出自を知る者の一人であり、その微笑を見てその冷徹とも取れる瞳を細め『まあ変わりはない』と答えた。

「珍しい事があるものね、私の記憶が確かなら、あなたから連絡を貰うのはこれが2度目。28年間ですよ？ 忘れていたのではなくて？」

セイラがそう言つとモニター越しの男、カイ・シデンは目を伏せて肩を竦ませた。

『相変わらずだな。もっとも『忘れたい』と思ったことはあるがね』
そんな相手の物言いにセイラはまた微笑を返した。

「あなたは変わったかと思ったのだけれど、その皮肉癖は変わっていないとわかって何だか嬉しいわ。あなたの書いた本、私も楽しく読ませて貰っていてよ？」

セイラがそう言つとカイは薄い眉を寄せた。

『嫌な事を言う…… それこそ皮肉にしか聞こえない。私の著書はあなたの兄上のことを良くは書いていないだろう』

「気にすることは無いわ…… それにあれについては私もあなたと同じ考えでしたもの」 セイラは頷きながらそう答えた。

『私は変つてなどいないさ。銃を持つのが嫌で、安全な場所からペンで叩いてるだけだ。サイド7であなたに頬を叩かれた時のまま、未だに『軟弱者』だよ……』

あの頃と違うのは、相応に歳を取ったのと着ている物が少し上等になったぐらいだ。これだって戦争に巻き込まれ、成り行きで兵士になった若造が娑婆に出て身の振り方に困り、見てくれを多少いじればいっぱしに見えるかと考えたすえの渡世術だ。外見だけはそれなりに見えても、中身は早々変わるもんじゃないと言う良い例だな』自嘲気味に語るカイのそんな言葉に、セイラは昔の懐かしさを噛みしめていた。あれからもう28年になる。かつて彼と共に戦ったのがまるで昨日の事のように脳裏によぎる。

セイラはかつて、1年戦争という大戦の渦中、彼と同じように連邦軍の当時最新鋭の強襲揚陸艦『ホワイトベース』に偶然乗り込み、現地徴用兵として半年ほど苦楽を共にした経験があった。その後の相次ぐ戦乱で当時一緒にホワイトベースで戦った仲間もだいたい減ってしまったが、彼は数少ない当時の生き残りだったのである。

「それで…… 昔話をしに連絡をしたわけでは無いのでしょうか？ 私に何か？」

セイラは微笑んだままそう本題に切り込んだ。カイはその言葉にその冷たい瞳を光らせた。

『今日の夕方、シアトル近郊の空港でちょっとしたテロがあった。あなたならもう知つてると思うが……』

「ええ、ターミナルビルが破壊されたとの情報が届いてるわ。何でも未確認のMSが墜落したとか」

セイラはカイのその問いに直ぐにそう答えた。カイは渋い表情をしながらセイラを見た。

『あなたの『飼い猫』は相変わらず優秀なようだ。まだ1時間も経ってないんだがな……』

カイはそう言って肩をすくめて見せた。

『まあいい、それでその墜落したMSなんだが……　どうやらガンダムタイプの新型の様だ。私は偶然その場所に居てね。墜落したビルの反対側のビルにいたので難を逃れたんだが、その様子を見ていたんだ』

セイラはカイの言葉を聞きながら少し考えた。

『ガンダム……　3年前に起こったマフティーの時に使用されたガンダムではなくて？』

『いや、別の物だ。ずいぶんと小型なMSだった。墜落したときも1機いてな、ザクに似た機体だったが、そのMSより頭一つ分は小さい。しかもその動きが変わっていた』

『変わっていた？』

セイラはカイの言葉にオウム返しでそう聞いた。

『何というのかな……　凄くなめらかだった。たとえるなら、そうだな……　まるで生き物のような動きだ』

セイラはそのカイの言葉から想像するが、全く思い付かなかった。『ごめんなさい。生き物のようなMSなんて、全然想像が付かないわ』

『そうだろうな。この目で見た私でさえちよつと説明に苦しむ』

『それで、そのMSは？』

『2機とも空へ飛んで離脱していった。ザクに似た機体は上空に旋回待機させていたSFSに乗っていったようだが、そのガンダムタイプは単独で飛行していったらしい……』

セイラはモニターに映るカイから視線を外し、記憶を検索していた。彼女の元には世界中から情報が集まってくるのだ。それはこういった知人からもそうだが、その情報の殆どは彼女が独自で持っている私的諜報機関『ルシファ』という組織からだった。この『ルシファ』という名前は、彼女が幼少の頃飼っていた猫から捕った名前

で、先ほどカイが言った『飼猫』という言葉はその機関を表す隠語だったのである。

『だが私が気になるのはもう一つあるんだ。その墜落事故の犠牲者の名前の中にある人物の名前があった』

考え込んでいたセイラを見ながら、カイはそう続けた。そんなカイの言葉にセイラは無言で向き直り、その冷めた瞳を見つめた。

『ベルトーチカ・チエカ・イルマという女性だ。あなたも知っているだろう？』

カイの言うとおり、その名前はセイラの記憶の中に確かにあった。名前は以前から知っていたが、会ったのは5年ほど前だ。セイラが会長を務める環境保護団体の集まりの折り、取材に来たジャーナリストが彼女だった。

「ええ…… お亡くなりになったのね、彼女」

セイラの心の中になんとも言えない感情が沸き上がっていた。その感情はベルトーチカと共通のある知人に起因していた。

『ああ、それでその事故当時、彼女の例の息子が一緒だったはずなんだが、その息子が行方不明になっているんだ』

セイラはその息子のことをある人物から聞いて知っていた。その出自のこともその人物から教えて貰っていたのだった。そして今の話しぶりから、カイもまたその人物から聞いていたのだろうと推測した。

「考えたくは無いけれど…… 建物の倒壊に巻き込まれたのではないくて？」

『実は私もそう思っていたんだが…… ちょっと気になる事があった』

「どんな事かしら？」

カイはセイラのその言葉に『ああ』と頷いて続けた。

『その墜落したガンダムタイプのMSに子供が乗り込む姿が空港の防犯カメラに写っていた。私もジャーナリストの特権を使って確認したが、背格好から言っても彼の様に見えた。MSはその彼を

乗せたまま空へと離脱していった』

カイはそこで一端言葉を切り、モニター越しからセイラを窺っていたようだった。

「人違いだったのでは？　——なんて質問は愚問なのでしょうね……」

セイラのその言葉はすでに答えが出ている者の言葉だったが、カイはあえて答えた。

『それでもジャーナリストの端くれだ。他人の顔の記憶力はある方だと自負している。歳を取ったとはいえ、まだ現役でいるうちは自分のそう言った部分には自信を持っていたいな』

カイの言葉にセイラは深いため息を吐いた。

ガンダムという名を持つMSには初代から不思議な逸話が多く残されている。その名を冠したマシンには、何かそう言った不思議な事象を引きつける魔力のような物があるような気がしてならない。ましてや今回の一件がもしカイの言う通りの事だとしたら、これはもう因縁としか言いようがないとセイラは思った。

『それで、実はその2機の素性を知りたくてあなたに連絡したんだ。あなたなら心当たりがあるんじゃないか？』

セイラはモニターに映る白目の多いカイの目を見つめた。

「何故私？」

セイラは心の中を全く見せない微笑のベールでそう聞き返した。

『軍縮に消極的なアナハイムがあのような小型のMSを作るとは思えない。仮にアナハイムが作ったとしても、連邦と癒着の強い企業だ。どこかしらから情報が流れてくるはずだ。しかしそんな情報は今のところいっさい無い。』

とすると製造元は一気に絞られるが、問題は開発元がどこかって事だ。3年前のマフティー事件以降、MSを開発、運用できる軍事組織などちょっと思いつかなかったが、そう言えば去年辺りから裏社会でチラホラ聞くうわさを思い出した』

カイのその言葉にセイラは記憶の中のある人物を思い浮かべてド

キツとした。モニターに映ったカイの探るような視線を受けつつ、セイラは心の中の動揺を表情に出さず努めて平静を装った微笑を浮かべながら、これがモニター越しで助かったと思った。

『海賊のような名前の武装集団の噂だ。私も多方面から独自に調査してはいるが、どの道もあるところで壁にぶち当たり、それから先は全くわからなくなってしまうんだ』

無言で話を聞くセイラにカイはさらに話を続ける。

『だが、それらに共通してある企業の名前と、それに連なる名家の名が浮かんでくる。ブッホ・コンツェルン……そしてロナー族……』

カイはそう言って煙草をくわえ火を付けた。口元から立ち上る紫煙の向こうで、事実を知ろうとするジャーナリストの目が怪しく揺らいでいた。

『今回の事件で事を起こしたその2機、その集団の所有する物なんじゃないかって話を聞いたのさ』

そんなカイの言葉を受けるセイラは（やはり食えない男だ）と胸中で呟いていた。

「ジャーナリストがうわさ話を信じてるなんて意外ね」

『スクープのネタは何時だって噂からさ。数ある都市伝説めいたうわさ話の中から、自分の勘を頼りにこれだと思う物に焦点を絞って一つずつ検証していく。それがこの仕事の基本でもある』

モニター越しのカイは紫煙をくゆらせながら微かに微笑した。

「勉強になったわ」

セイラもそう言っただけで微笑を返した。

『あなたは確か、あそこの若社長とつき合いがあったと思ってね。そちらの線から話を聞けるかと思っただけ……　どうやら見当違いのようだね』

カイはセイラから視線を外し、半分まで灰になった煙草を手元の灰皿でもみ消した。セイラの耳にそのカイの言葉は『何も話す気はないらしい』と聞こえた気がした。事実、セイラはカイには何も話

さないつもりでいたのだった。

『ただ、あの息子の消息だけは知っておきたいと思ってね』

カイはそう言って目を細め、どこか遠くを見るような仕草をした。
「カイは会ったことがあるの？」

そんなセイラの問いに、カイは遠い目をしたまま答えた。

『何年か前にイルマ家を尋ねたことがあった。お互いジャーナリストのよしみで、当時私が追っかけていたあるネタについての情報を提供してくれるというので出向いてな、その時彼に会った。』

当時はまだジュニアスクールに通う子供だった。顔つきは母親似だったが、体から滲み出る得も言われぬ雰囲気と、あのどこか遠い場所を見透かすような澄んだ瞳は父親によく似ていた。ベルトーチカは実の親父の事を息子には話して無いようだったが、会って直ぐに判ったよ。『ああ、アイツの子だ』ってな』

「どうしてその子のことが気になるの？ カイはあの人の事を嫌っているのかと思っていただけれど……」

セイラはそうカイに聞いた。

ホワイトベース

『WBと一緒にいた頃は嫌いだったかもしれないね。私と違い、彼は優秀だったから。そして純粋だった……』

昔を懐かしむように、カイは言葉の語尾を霧散させた。

『苦楽を共にした戦友だから、なんて言葉を吐くつもりはない。だが……』
ホワイトベース WBがベルファウストで補給を受けたときのこと、あなたは憶えているだろうか？』

カイのその言葉にセイラは記憶の中にある当時の事を検索し「ええ」と答えた。

『あの時私は半間上陸にかこつけて船を降りようとしたことがあった。あの日の昼間にあったレビル將軍を交えた会議で、死ぬまで兵隊をやらされると嫌いになったんだ。本当に当時の私は軟弱者だったんだな』

そう言ってカイは鼻の頭を掻きつつ苦笑していた。

セイラも頭の中で当時の自分に今を重ねるようにあの日のことを

思い出していた。

あの日、夜半過ぎに海上からジオン軍の襲われ戦闘になった。出ていったはずのカイは戦艦ドックで黒煙を上げているWBを見て、居ても立っても居られずに艦に戻ってきて戦闘に参加した。結局彼はそれから終戦の日までWB隊のパイロットとして戦うことになったのだ。

『私が艦を降りようとしたとき、アイツだけが私を引き留めた。『あなたの全てが好きというわけではないが』などと余計な前置きしながらね。アイツらしい言葉だったが、それでも私は結構嬉しかったのだよ。』

お互い餓鬼だったって事もある。あの艦には何というのかな、学校のような気安さがあっただろう？ 『今日まで一緒に戦ってきた仲間だろ』なんて、今時青春ドラマでも使わないような安っぽい言葉だが、アイツに言われると何故か胸に刺さった。あの時アイツにああ言われなければ、私は本当にあのままあの場所でジャンク屋かチンピラになっていただろう。今でもそんな気がするのさ。

そんなアイツがアクシズ戦で行方不明になり、あいつの乗ったガンダムが回収されたと聞いて月にまで出向いて確認したこともある。私は結局、アイツに何一つ借りを返せないまま生きている。

ガラにもない事だって判っちゃいるが、母親も亡くなってしまった事だ。せめてアイツの残した彼の行く末だけは見届けてやろうかなどと考えている自分がいる。歳を取ったと笑ってくれて良いよ』

カイはそう言っただけで目を逸らしながら苦笑していた。セイラはそんなカイを見ながら微笑した。

「歳をとったのはあなただけじゃないわ…… 判りました。私も独自に調べてみましょう。何か判ったら連絡するわ。連絡先は以前聞いたものとお変わりなくって？」

『すまない。恩に着る』

セイラはモニター越しのカイに「気にしないで。それではごきげんよう」と言っただけで端末を切った。そしてしばらく考えた後、再び端

末を操作した。きつかり1回のコールの後相手が出たのを確認してセイラはこう告げた。

「ハウゼリー・ロナ氏と会う手配をお願いできて？」

数回の相づちをうった後、端末を切ったセイラは椅子から立ち上がり、後ろにある窓の側に立ちカーテンの隙間から外を覗いた。庭園灯に照らし出された、よく手入れをされた広い自宅の庭の向こう、遠くに見える黒い海面に空の星々の輝きが揺らいでいるのが見えた。そこにかつて一度だけ心を寄せた人物の姿を幻視し、セイラは深いため息をついた。

その彼の後の人生を決定づけてしまったマシン。それによく似たマシーンに彼の忘れ形見が乗り込むという偶然と言いがたい事象。繰り返される時の気まぐれに、セイラは何か途方もない力に紡がれる運命の糸の音を聞いた気がしてわずかに身を震わせた。

「運命なんて言葉、好きではないのだけれど…… あなたには時が見えて？」

幻視したその後ろ姿にそう語り掛けるが、その背中が何も語らないことをセイラは良く知っていたのである。

第1章 エピローグ（後書き）

初めての人は初めまして。毎度私の拙作を読んで下さる方は毎度どうもです。

鉄屋でございます。

今回は（6）と第1章のエピローグの实质2話分を更新しました。引き続き第2章に突入しますが、リアルで少々たて込んできましたので若干更新が滞るかもしれません。ゴメンナサイ（汗）

さて今回ようやくビーストが空港を離脱します。アムラスのコントロールで動いているビーストですが、色々と装備を明らかにしております。でもまだアムラスはビーストの力を半分も出せておりません。それは第2章以降に持ち越となります。追撃する連邦のグスタフ・カールを撃墜したSMミサイルですが、これは閃光のハサウエイで搭乗した兵装です。でも私、原作をどこかにやってしまい、遠い記憶を辿って書いてますので描写が原作と違うかもしれません。ご容赦を！

でもどこへやってしまったんだろう…… 本屋に行ってもなかなか売って無くて困ってます。もう一度読みたいのでアマゾンで買ってしまうおうか……

あとエピローグは終始セイラとカイの会話で終わります。この2人、確か原作では相性最悪でしたよねw まあそんな2人でも昔話に花が咲いたりするんだろ？うなあなんて考えて書いてみましたがいかがだったでしょうか？

少し気になったのがマフティー事件の話題が出たときの2人の反応です。ブライトの息子であるハサウェイがマフティーだという事実はニュースで公表されているはずなので、それをセイラが悲しむような描写を初めに書いたんですが、どうも違和感があったのでボツにしました。しかし改めて書いた物も、実はあんまり納得がいってないんですよ（マテコラ！）でも上手いこと繋ぐ描写が出来なかつ

たんでこのまま出しました。うーん、難しい。

でも楽しく書いているのは事実です。原作の雰囲気似せて書いているんですがあまり上手く行ってませんか？ 殆どが私の妄想の産物ですが、読んで下さる方が「まあなんとなくあり得る話かな」とか思っ下さると嬉しいなあw

鉄屋でした。

第2章の登場人物&登場MS紹介

第2章を彩る登場人物紹介

アムラス・チエカ・イルマ（オリジナルキャラ）

母を迎えに行った空港でビーストの墜落に巻き込まれ、偶然ビーストに乗り込んでしまう少年。実の父を知らずに育つが、その父の血を受け継いだ為か時折非凡な感性を示す。

ミル・ジヨスター・アカギ（オリジナルキャラ）

アムラスの幼なじみの少女。彼と一緒にアムラスの母親を空港に迎えに行ったが為にビーストの墜落事故に巻き込まれてしまう。

ベルトーチカ・チエカ・イルマ（登場作品：Zガンダム他）

アムラスの母親。ビーストの墜落で崩れたガレキの下敷きになり命を落とす。臨終の際に息子であるアムラスに実の父の意志を伝える。

アルガット・ベンダー（オリジナルキャラ）

複合企業ブッホ・コンツェルンの社長、ハウゼリー・ロナの創設した秘密武装組織『クロスボーン・バンガード』のMSパイロット。

バイヤ・オズマリー（オリジナルキャラ）

アルガットと同じく『クロスボーン・バンガード』のMSパイロット。アルガットとは親友の間柄。

ハウゼリー・ロナ（年表にのみ登場、性格などはオリジナル）

複合企業ブッホ・コンツェルン現社長にしてアルガット達が所属する秘密武装組織『クロスボーン・バンガード』の実質トップでもある。

セイラ・マス（登場作品：ファーストガンダム他）

元強襲揚陸艦ホワイトベースのクルーの一人。莫大な財力で環境保護保全団体デアボロ財団を設立しその会長を務める傍ら、多方面にその敏腕ぶりを発揮する女実業家でもある。私設諜報機関『ルシファ』を使つて世界中の情報に精通する。

ナナコ・マス（オリジナルキャラ）

セイラの養女。16歳にして飛び級で日本のカレッジに通う才女。ある人物の紹介でセイラの養女になったのだが、出自はセイラと紹介した人物しか知らない。日本で禅を学んだせいか普通の人は異なる感性を持っている。養女になる前の姓は実母の姓を名乗っており、ナナコ・ミゲルといった。（第2章からのヒロイン）

カイ・シデン（登場作品：ファーストガンダム他）

セイラと同じく元ホワイトベースのクルーの一人。現在はアムラスの母であるベルトーチカと同じフリーランスのジャーナリストで、世界各地を渡り歩いている。彼の著書はジオニズムをかなり斬新な切り口で書かれており、読み物としては高評価を受けていてその筋では有名人。

ケネス・スレッジ（登場作品：閃光のハサウェイ）

元地球連邦軍大佐で、地上における対テロ部隊『キルケー・ユニット』の指令だった人物で、マフティーであるハサウェイの駆るクスイーガンダムを捕獲した経歴を持つ。その後ハサウェイ処刑の件で保身を図った上官に裏切られ、その体制が嫌になり軍を自主退役する。日本の九州の村で自給自足の生活をしていたのだが、ハウゼリィ・ロナの誘いで『クロスボーン・バンガード』の指令になる。

レーン・エイム（登場作品：閃光のハサウェイ）

元ケネスの部下でハサウェイのクスイーガンダムの兄弟機にあたる第五世代MS『ペーネロペー』を駆り戦ったパイロット。現在は階級が大尉となり、連邦軍第7MS空戦部隊の隊長として任務に従事している。今回ビーストと戦う為、かつてのライバルMSクスイーを持ち出すことになるのだが……

ミトーナ・エリクシル（オリジナルキャラ）

レーンの部下で階級は少尉。年齢は19歳で女性ながら現在の『ペーネロペー』の専属パイロットを務める。サイコミュ兵器を操る事の出来る感応波を発揮するが、感情の起伏が激しくそのせいでサイコミュ兵器の稼働が不安定になる。

ジョブ・ジョン（登場作品：ファーストガンダム他）

セイラやカイと同じく元ホワイトベースのクルーの一人。現在はサナリイでMS開発に携わっており、RXF-108BD ビーストも基本設計は彼によるもの。その設計は後に彼が設計するフォーミラーシリーズに受け継がれることになる。（名前だけ登場予定）

モニカ・ミクニソン（登場作品：ガンダムF91、ただし旧姓はオリジナル）

元々は月面都市フォン・ブラウンにあるアームストロング工科大学院の研究生だったが、有機素子配列型第6世代端末、バイオコンピュータの研究開発の為サナリイに移籍した天才女性技士。研修時にサナリイで知り合った金属工学の権威、レスリー・アノー技士と結婚しモニカ・アノーとなる。ビーストの思考学習型戦略戦術AI『ウィップ』をプログラムした人物。（名前だけ登場予定）

カロツゾ・ビゲンゾン（登場作品：ガンダムF91）

モニカと同じく元アームストロング工科大学院の研究生で、モニカと共にバイオコンピュータの研究開発を行った人物。モニカの先輩

にあたる非常に優秀な研究者であり、優しい先輩でモニカの良き理解者であった。2年前にロナ家の婿養子になるが、その頃から少しずつ考え方が変わっていった。現在は『クロスボーン・バンガード』の技術顧問をしている。

マイツァー・ロナ（登場作品：ガンダムF91）

ロナ家の現当主であり、複合企業ブッホ・コンツェルンの会長。父親の理想を受け継ぎ、高い理想と秩序を伴った社会の構築を目指す高潔な人物。現在の連邦政府高官達の腐敗ぶりを憂いている。上に挙げたハウゼリー・ロナの父親。

ザイナル・ザダド（オリジナルキャラ）

ブッホ・コンツェルンの第二庶務課に所属する社員とのことだが、実際はマイツァー・ロナの秘書のような役割をしている。終始感情を表面に出さない物静かな男だが、時折見え隠れする雰囲気は気質の人間と言いがたい気配を纏う謎の多い人物。

第2章に登場予定のMS

RX-105 コードネーム（【三】クスイー）

3年前のマフティー事件でリーダーであるマフティーことハサウェイ・ノアが搭乗したアナハイム・エレクトロニクス社製の30m級のラージサイズMS。通称『ミガンダム』。ミノフスキークラフトシステムを搭載した第5世代MSで、重力下でバックアップオプション無しで自由に空をマッハ2で飛行することが出来る。操縦系にはサイコミュも取り入れられており、搭乗者の脳波を拡大するシステムを有する。また大出力メガ粒子砲を同時に搭載する非常に高性能で強力なMSである。アデレート襲撃作戦の時に、連邦議会に後一步のところでケネスの発動したビームバリアで隔座し、現在は機

体を回収した連邦軍によってオーストラリアのトリントン基地の地下に封印されている。

RX-104 コードネーム（オデュッセウス）・RX-104FF ペーネロペー

アナハイム製ガンダム20周年を記念として開発されたMSで、3年前に地球連邦軍に納品され、キルケー部隊のレーン・エイムの乗機となった。重力下でのミノフスキークラフト内蔵の飛行ユニット『ペーネロペー・ユニット』を装備する事により、『フライトフォーム』（高速機動形態）に変形し大気圏内を飛行する事の出来る第5世代型試作MSであり、上に挙げたクスイーのマザーマシンの機体。本来は素体である（オデュッセウス）というコードネームであるが、飛行ユニットを装備したコード（ペーネロペー）と呼ばれることが多く、搭乗者であるレーンやミトーナもそちらのコードを好んで使っている。クスイーと同じく実弾型サイコミュ兵器「ファンネルミサイル」を肩部ファンネルミサイルポッドに装備し、両腕部にビームサーベル兼メガ粒子砲を装備する強力なMSである。3年前にハサウェイの乗ったクスイーと数回に渡り死闘を繰り広げたが、アデレートでの戦闘で大破した後に修復、改良され現在はレーンの部下であるミトーナの乗機となっている。

RGZ-106R+ コードネーム（リゼレッタ+【プラス】）

グリプス戦役時に開発され活躍したZガンダムの量産を目的に開発されたRGZシリーズの変形機構を備えたアナハイム・エレクトロニクス社製第3世代型MS。変形時に機体下面に収まる大きめのシールドに内蔵されたMY式タービンによって大気圏内での航空機飛行を行う事が出来る。変形機構はZ系を継承し、変形後のウェーブライダー形態はZと同じく航空機のようなシルエットを持つが、オリジナルであるZガンダムと違い、大気圏再突入能力はおろか宇宙空間での稼働すら出来ない完全な重力下仕様のMSである。しかし大気圏内では現行の地上軍主力であるグスタフ・カールを遙かに凌

ぐ機動力と空戦攻撃力を発揮する高性能な機体。

ブローグ

見よ、このベヒモスを。

これはあなたと並べてわたしが造ったもの
牛のように草をくらう

見よ、その力は腰にあり

その強さは腹の筋にある

尾は杉の木のように垂れ、ももの筋は絡み合っている

骨は青銅の管、肋骨は鉄の棒のようだ

これは神が造られた第一の獣

これを造られた方が、ご自分の剣でこれに近づく

最後の審判が下りたもうなりし日に

その神の獣は罪多き民の糧とならん

旧約聖書「ヨブ記」第40章より

ゆったりと揺らぐ水面に垂らした釣り糸の先の浮きが微かに沈む
のを見て、ケネス・スレッジは竿を持つ指から少しだけ力を抜き、
手首を海面の動きに委ねてみた。この瞬間は銃の引き金を引くとき
に似ているとも思う。その一瞬まで、肩や腕、そして手首と指
先の緊張を緩ませるのだ。

麦わら帽子のツバの先に、水面に浮かぶ浮きが発する波紋を睨み
ながら、水面下で餌をつついていている魚をイメージする。

（まだだ……）

餌を二、三度つつき、場合によっては一度口に入れ吐き出す。単

に遊んでいるのか、それとも用心深いのか判らないが、実はケネスは後者ではないかなどと考えている。

飼育されている物ではなく、自然界の野生の生き物はすべからくしたたかである。天候さえ管理されたコロニーでは決して培うことの出来ない魂を宿した純自然な生き物。小さく、些細な命でさえ、この惑星の偉大なパワーを実感するファクターであった。

ふと浮きが海面に潜り込んだ瞬間、ケネスは手首を返して竿を跳ねさせた。すすつと糸が左に引かれ、竿が大きく弧を描いてしなるのを見ながら、ケネスは立ち上がって竿を両手で持ち直した。

（引きが強い、そこそこのヤツだ！）

心の中でそう呟きつつ、手元のワイヤーロックを外してリールグリップを数回回す。一度引きに合わせて竿を戻し、もう一度竿を引きながらリールを回した。糸を切ら無いように慎重に張り具合を確認しながら、ケネスは数回その動作を繰り返した。

水面に魚影が見え始め、やがて尾ひれがバシャバシャと水面を叩くを確認すると、ケネスは一気に竿を持ち上げ釣り上げ、そのまま手元に引き暴れる魚を手で掴み口から針を抜いてバケツに放り込んだ。

「旦那、やるねえ……」

ケネスの隣に座っていた初老の男がそう賞賛した声を漏らした。名前は知らないが、この防波堤では良く見かける顔馴染みの男だった。

「晩飯ですよ。釣れなきや困ってしまう」

ケネスがそう日本語で言って苦笑すると男は頷きニツコリ破願した。そうすると日に焼けた顔に刻まれた皺が一層増えた。

ケネスは相手のそんな顔にもう一度苦笑を返し、竿を仕舞い始めた。するとその男が意外そうな顔をしてケネスに聞いた。

「あれ？ もうお開きかい？」

ケネスは『お開き』という言葉を一瞬頭の中で考え、それが『終わり』と言う意味であったことを思い出して「ええ」と頷いた。こ

の国の言葉は同じ言葉でもその場の状況で使い分けるという事によ
うやく慣れ始めていた。

「『釣りすれど網せず』ですよ。私の食べる分だけで良い」

ケネスがそう言うとその男は膝をパンッと叩いて頷いた。

「なるほど、これは一本取られたな」

『一本取られた』の意味がケネスには良くわからなかったが、そ
の男の雰囲気からして不快なことではないだろうと考え微笑を返し
た。

それからケネスは「お先に」と男に声を掛け、釣り道具の入った
バッグを肩から提げ、右手に疊んだ竿と左手にバケツを提げ防波堤
を後にした。

被り直した麦わら帽子のツバの先に見える太陽がようやく西に傾
き、夕方の臭いを運んでくる心地よい風に吹かれながら、ケネスは
ゆっくりとした足取りで家路を歩いていった。

この地に住み始めて3年、ようやく慣れ始めた頃だった。初めは
違和感のあったこの草履という履き物も、慣れてみると開放感があ
り案外気持ちの良い物だと感じている。

先の大戦では、コロニー落としての影響で地球の自転周期が早まり、
この国の『四季』という季節変化に大きな狂いが生じたと言いが、
オーストラリアや南米、中央アジアと比べれば被害は皆無と言って
いいレベルである。気象変化で温暖化が進んだと言われるが、ここ
から千キロほど北上すれば冬は今でも雪が降ると聞く。自然の野山
が真っ白に染まる風景も一度は見てみたいものだとかケネスは思っ
ていた。

そんなことを考えているうちに家が見えてきた。この国の昔なが
らの作りをした平屋の家だ。宇宙世紀に入ってもなお、この国の人
々は在来に住居を好んでこんな家を残している。ケネスはその『古
き良き物』を愛するこの国の人の感性を好ましく思うのだった。

「ただいま帰りました」

ガラガラと引き戸を引き、玄関に入ると同時にケネスはそう言っ

た。すると「はい、お帰りなさい」と女性の声がして、足音と共に初老の女性が姿を現した。

「ヨウコさん、今日は鯖が釣れました。晩ご飯、お願いしても良いですか？」

ケネスがそう言つて手にしたバケツを差し出すと、ヨウコと呼ばれた女性はバケツを覗き込んで「あらあらホントに」と微笑んだ。

この女性は近くに住む農家のお上さんで、この国の生活に慣れないケネスの身の回りの世話をしてくれているのだった。元来世話焼きなせいかな暇なときはこうしてケネスの家に来ては家事をやってくれる。何でも自分の家の家事は嫁がやっているの自分はやることが無く、孫も居ないせいかなこうしてしょっちゅうケネスの世話をしてくれるのだった。

「お客さんですか？」

ケネスは玄関に揃えてある紳士靴を見て、そうヨウコに聞いた。

ヨウコはバケツから視線を外してケネスに答えた。

「ええ、ケンさんに大事な話があるとかで。出かけてると言ったら『外で待つてる』なんて言うもんだから、外は熱いから日射病になっちゃ大変だし、上がって貰ったんだけど……マズかったかい？」

ヨウコは少し心配そうな顔でケネスを見ていた。ヨウコは初めてあったときからケネスのことを『ケンさん』と呼んでいた。どうやら『ケネス』が言いにくい様だった。ケネスはそんなヨウコにニツコリ微笑み「いいえ、かまいませんよ」と答えながら草履を脱いで玄関に上がった。ひやりとした木の板の感触が足裏に心地よく感じた。

「ヨウコさん、私に冷たいバーリーティー、お願いします」

ケネスはバケツをヨウコに私ながらそうお願いした。「ああ、麦茶だね。座敷に持っていくよ」ヨウコはそう言つてバケツをもつて台所の方に消えていった。ケネスは洗面所で手を洗った後、座敷に向かった。

板の間の廊下から開け放たれた障子戸を潜り、同じく開け放たれ

た襖の鴨居に頭をぶつけない様に注意して座敷に入った。

座敷に続く縁側から心地言い風が入るのを感じながら座卓の下座に座るスーツ姿を見やる。髪は白髪交じりだが、敏も丁寧に手入れされた品のいい中年の男が座布団の上に正座して座っていた。中東系の顔立ちと掛けた銀縁の眼鏡が少々ちぐはぐなように感じられたが、あまり日に焼けてない肌がその違和感を薄い物にしていた。

正座したその姿は一分の隙もないと言った感じで、声を掛けなければずっとそこにそうしているような、背景と一体化した人形や絵のような印象を受ける。

「待たせてしまいました」

ケネスはとりあえず地球圏での統一言語である英語でそう声を掛けた。そのケネスの声で、その男はようやくその置物のような佇まいを崩し、こちらに顔を向けると同時に頭を下げた。その瞬間ケネスは懐かしい臭いを嗅いだ。微かな臭いだが、ケネスの感覚はその臭いを正確に読み取っていた。

（気質じゃないな……）

心の中でそう呟きつつ、ケネスは座卓を挟んでその男の前にある座布団に腰を下ろした。

「お初にお目に掛かります、ザイナール・ザダドと申します。ケネス・スレッジ大佐」

男はそう名乗りながら名刺を差し出した。ケネスはその名刺を手に取りながら「元、大佐です」と相手の言葉を訂正した。名刺には『ブッホ・コンツェルン、第2庶務課』とあった。

（ブッホ・コンツェルン……？）

その企業名は記憶にあったが、自分との繋がりについては皆目見当が付かなかった。ケネスが怪訝な顔をして相手に視線を移すと、相手はそのケネスの言葉を予測していたかのように「これは失礼いたしました」と即答し、再び頭を下げた。

「突然お伺いして申し訳ありません。私は主からケネス様にある件をお願いするよう命じられてまいった次第でございます」

「ある件？」

ケネスは眼鏡の奥に光る感情の絶えた瞳を見つめながらそうオウム返しに聞いた。

「実は我が主の創設した部隊の指揮官を引き受けて欲しいのです。本日はそのお願いにまいりました」

とその時、座敷に麦茶を持ってきたヨウコが入ってきた。ヨウコは座卓の前で正座をして丁寧にお辞儀をした後、ザイナールの空になったグラスに麦茶を注ぎ、続いて持ってきたグラスにケネスの分の麦茶を注いでケネスの前に置き、麦茶の入ったポットと盆をケネスの横の床に置いた後、深々とお辞儀をして座敷を出ていった。

一瞬話の内容が内容なだけに、ヨウコの事が気になったが、終始英語ではなしているのでヨウコが判るものでは無いだろうと思い直した。この国の歳のいった人は、宇宙世紀に入っても自国語以外は使いたがらないというのをケネスはこの3年間に学んでいたのだった。

釣りから帰ってきたばかりのケネスは、喉がカラカラに乾いていたことを思いだし、「失礼」と言いながら一気にグラスを煽った後、再び手元のポットから麦茶を自分のグラスに注いでからザイナールに向き直った。

「私設部隊の指揮官？ 私にですか？」

麦茶で人心地付いたケネスはそうザイナールに聞いた。ザイナールは「左様で……」と頷いた。

（民間企業の私設部隊…… P M Cの様な物か？）

ケネスは内心かなりきな臭さを感じていた。この正規軍でさえ軍縮が叫ばれ、末端の地方警備の兵士の中ではリストラまであるという平和な世の中で、そんな組織の活躍の場があるとも思えない。だとするとその存在目的は？ と考えると不穏な想像しか浮かんでこなかったのである。

「私設部隊と仰るが…… どのような物です？」

「高潔な理想を持った練度の高い兵士を育成し、連邦軍へ提供する。

今のところはそんな形です」

ザイナーは表情を変えずにそう答えた。

「しかしまあ、これは表向きな話です……」

「表向きなどと改めて言うからには、当然裏もあると解釈するが？」

ケネスはザイナーの眼鏡の奥の色素の薄い瞳を見つめた。

「我が社の総帥、マイツァー・ロナは今の連邦軍に強い危機感を持っておいでです。不測の事態に兵は不和雷同し、いたずらに兵器を振り回し民間人を巻き添えにする。出世と保身、そしてなにより自身の特権を守ることのみを命題とする、指揮能力の欠如した将校並びに軍幹部…… 軍をまるで自分たちの道具の様に私的に使う政治家達に、嬉々として尻尾を振る始末。自国民を守る為の組織とはほど遠い組織です。」

3年前のマフティー事件では、あなたの部隊がいなければ事態収集はかなわず、連邦議会は潰されていたでしょうな」

ザイナーは少し皮肉めいた口調でそう言った。

「こんな話の中で連邦軍への不満を聞くと、不遜な考えがあるように感じてしまう…… 連邦に弓引く所存か？ とね」

ケネスは相手の機先を制するつもりでそう言った。だがザイナーは余裕の笑みを浮かべつつ答えた。

「今のところそこまでは考えておりません。が、現在の連邦軍の歪んだ体質を変えるには、ある程度の痛みを伴った改革も必要かと。病んで膿がたまった部位は放置すると健全な組織を浸食してしまいます。あなたはそれを嫌って軍を辞めたと解釈しておりましたが？」

ザイナーは逆にケネスにそう質問してテーブルの麦茶に口を付けた。ケネスはそんなザイナーを見ながら考えた。

確かにケネスは3年前のマフティー事件の直後、軍を自主退役していた。非合法武装組織『マフティー』の実質的なリーダー、マフティー・ナビーユ・エリンことハサウエイ・ノアの処刑の折り、ケネスの後任で赴任してくるハサウエイの父親、ブライト・ノア大佐への配慮でマフティーがハサウエイであることを口外しないよう上

司に歎願したのが、出世と保身を計った上司にリークされ、その事実はブライトの知るところになってしまった。

その一件でケネスは今の軍の体質が嫌になり退役したのだった。

「私がどんな理由で軍を辞めたかなどどうでも良いことだ。それを理由に私を招聘しようと考えたなら見当違いも甚だしいと言わざるを得ないですね。そもそも私が軍を辞めようと思った意志すら意味を持たなくなってしまう。そのような考えなら早々にお引き取り願おう」

裏切られたから仰ぐ旗を変えるでは子供の理屈と変わらない。ケネスは少々心外な気持ちを味わっていた。

「これは失言でした。しかしなるほど……これは是非あなたに来て頂かなくてはと思う気持ちが強くなりました」

ザイナールはそう頷きながら目を細めてケネスを見た。

「マイツツァーは『貴族主義』という思想を掲げております。聞いたことはありますか？」

その思想は聞いたことがあった。軍にいたとき連邦議会でも最近ちらほらと話しに挙がると聞いたことがある。『貴族』などという言葉が逆にケネスには矮小な印象を感じ興味を削がれていたのだ。

「ええ、以前に聞いたことはあります。一部の議員の間ではそれについての勉強会なる物が開かれてるとか……貴族なんて言葉は我々軍人からは遠い存在という印象があつて、大方議員達の特権意識を肥大化させた物だろうと聞き捨てておりました。私たち庶民にはなおのこと縁のない存在です」

ケネスは軍人時代に聞きかじった事を交えて、自分の感じたことを素直に言った。

「確かに、その名から想像するには少々芝居がかった物を想像してしまいがちですな。特権を傘に民衆を支配する……過去の歴史上でもそう言った貴族が多かったのも事実です」

ザイナールはそこで一端言葉を切りケネスの反応を伺った。ケネ

スはまるで興味なしといった姿勢を崩さずザイナールを見つめた。

「ですが、主のマイツァーが考える貴族とはそう言った物ではありません。もっと高貴で高潔な存在です」

「高潔？」

ザイナールの時代がかった物言いに違和感を感じながらそう聞いた。『高潔』などという言葉は古い時代小説ぐらいにしか出てこず、現実で聞いたことはなかったからだった。

「己を律し、他人を律する事によって健全で正しい価値観を見いだすことの出来る精神を養う。これは先代のシャルンホルスト・ロナの考えでもありました」

シャルンホルスト・ロナとは旧姓をシャルンホルスト・ブツホといい、ジャンク屋から一代で財を築き、産業界のみならず政界にまで発言力を持つ世界有数の大企業、ブツホ・コンツェルンを作った希代の経営者である。彼のそのサクセスストーリーはドキュメンタリー映画にまでなっていた。

元々コロナー建設で出る廃棄物やデブリを回収、再生する事業から端を発し、UC-0079に起こった『一年戦争』で出た大量のスペースデブリによって飛躍的に急成長を遂げ、今では軍需以外のあらゆる産業に進出している複合企業になった。そんな成長著しい企業だけに、一部では『成り上がり者の代名詞』などと陰口を叩かれてもいる。

その財力で地球の欧州の名家『ロナ家』の名を買い取り、自分の息子に政界に入れるなど政治的地位も強固にしている財界の風雲児と呼ばれた人物だった。

「一部のマスコミ等では着色された人物像が露出しており、その異端な経営能力ばかりがクローズアップされておりますが、シャルンホルストは自分の財力を拡大させる為だけに事業を展開していたわけではありませんでした。その理想は遙か未来を見据え、人類を永遠に存続させる事を目的とした理想社会を実現するという彼の夢の為の手段でした。」

民衆の手本となることを自らに課し、社会的な問題や構造の改革を目的とする。つまり、ふさわしい人々によって指導される社会。文字通り『貴うき者』貴族ですよ」

ザイナールはそう言つてまた一口麦茶を口に含んだ。

「理想社会…… 身分の上下を付ける社会が理想社会だとは、私には到底思えませんね。人は平等であるのが理想ではないですか？」

「人権は平等であるべきです。でも同じ人間は2人と居ない。人にはそれぞれ役割があります。銃を突きつけられ、人民は恐いと言つて逃げてでも致し方ない。しかし上に立つ者はそうではダメなのです。兵は銃を持ち戦い、いざというときは弱き人民の盾になる。その兵を率いる者は兵に死地にやる権限がある替わりにいつでも自分も死ぬ覚悟を持つ。それが正しい軍のあり方であり、上に立つ者の気概であり責任でもあると思います」

ケネスの反論にザイナールは涼しい顔でサラリと返した。

「それは論理の飛躍だ。現に私や私の部下は皆そう言う思いで戦つてきた。私が軍を辞めてからも、彼らはそう思つて任務を遂行していると思じてる」

「仰るとおり、あなたには上に立つ資格があると私も思います。そんなあなたであるからこそ、我が主は私をここによこしたのです。ですが、今の連邦にあなたやあなたの元部下のような兵士や士官がどれほどいるでしょうか？」

ザイナールのその問いにケネスは黙るしかなかった。それはケネス自身が身にしてみても判つていたことだったからだ。

「企業と癒着する政治家、それを助長するかの如く振る舞う官僚、それらに尻尾を振り己の保身のみを計ろうとする軍幹部…… そんな輩に人の上に立つ資格はない。それを身にしてみても感じたから、あなたは軍をお辞めになった……」

ケネスはザイナールの言葉に何一つ反論できないまま話を聞いていた。

「実はあなたという人物を、我が主はある女性から紹介されたので

す」

黙り込むケネスにザイナーはそう声を掛けた。

「女性……誰です？」

そう聞いたものの、ケネスには何となく見当が付いていた。

「ギギ・アンドンシア様です。あなたはあの方に仰ったそうですね？ 『アムロ・レイの様なニュータイプと呼ばれる者達が身を寄せ、真に活躍できる組織を作りたい』と」

ギギ・アンドンシア。10代ながら某大保険会社の創設者である大富豪の愛人で、ケネスとは3年前に地球に降りる際に乗船したシヤトル『ハウンゼン』で乗り合わせた際に起こったハイジャック騒ぎで知り合った。その後マフティー事件を最後まで見届け、ケネスと一緒にこの九州までつき合い、しばらく滞在した後、彼女のパトロンのが用意した香港のアパートメントに帰っていった。

今でも忘れた頃にメールが来るが、もう2年以上会ってはいない。丁度2ヶ月ほど前に来たメールでは、パトロンのと別れて気ままな一人旅を計画しているとの報告があつたが、彼女が今どこにいるのかはケネスにもわからなかつた。

透き通るような白い肌と美しい金髪を持つ外見的にも非常に美しい女性だったが、彼女の魅力の本質はその不思議な能力にあつた。勘が良く、時には未来を言い当てる事もあり、彼女を擁護する作戦は必ず上手くいったりと、自分のみならず、周囲の人間にまで不思議な影響力を持っていたのだつた。

「去年、財界の著名人が集まる園遊会でお会いした時、我が主にそう仰っていました。不遜ながら容姿も大変魅力的な方ではございますが、それ以上に、何というか……とても不思議なお方でございました。『ケネスは必ず了承するから安心して』と、まるで予言めいた言葉を仰っておいででした」

そんなザイナーの言葉を聞きながら、ケネスは脳裏にギギの幼さを残した微笑を思い浮かべた。

（かなわな……）

ケネスは心の中でそう呟き苦笑していた。

「話が逸れましたが、ケネス様が想像する組織。ニュータイプが真に人の革新ならば、その力は人を正しき未来へと導く鍵となりましょう。そうした正しき力を持った者達がその力を充分に発揮するには、優秀な指揮官がいてこそでございます。そうして初めて組織として成り立ちましょう。」

我が主が作るうとしてしている組織は、まさにそう言った高潔で気高い精神を理想とする力ある組織、その名も『クロスボーン・バンガード』と言います」

「クロスボーン…… バンガード……」

ケネスはその名をゆっくりと口に出して呟いた。

「理想をかなえる為、より良き未来を創る為、人は時に悪をなさねばならぬ事があります。あえて海賊の旗印を使うのは、いずれ裁かれる事を覚悟する為の十字架。しかし理想の社会を切り開く尖兵と言う意味を込め、バンガード【尖兵】をその名にしております」

ザイナールはそう言うってケネスの目を見つめ、居住まいを正した。「今一度お願い申し上げます。我が主の創る理想に、何卒お力添えを」

そんなザイナールの言葉を聞きながら、ケネスは脳が痺れるような感覚を味わっていた。それはザイナールの言葉に感銘を受けたからではない。ましてや理想の社会を構築する事に携わる優越感でもない。軍人だった頃から自分の思い描く様な軍隊を統率するというその一点に、ケネスは酔ったと言った方が正しかった。それは優秀な指揮を執る者だけが感じるこの出来る一種の麻薬にも似た高揚感だった。だがあえてケネスはザイナールに忠告する。

「その組織が現行の連邦軍に取って代わるという事もあるでしょう。時が経てば結成時の気高い精神が薄れ、病んでいく組織は歴史上目数に存在してきた。あなた方がかの悪名高い『ティターンズ』のようにならないと言う保証はない。」

そうなったとき、私と私が指揮する部隊は、あなた方全てを滅ぼ

す側に回るかもしれない。その懷に大毒を抱えるようなものですよ？」

そんなケネスの言葉に、ザイナールは涼しげな表情でゆっくり頷いた。

「毒を食らわば皿まで…… その時はご随意になさいませ。むしろ我が主もそれを望むでしょう」

ザイナールはそう言つてわずかに口元を歪めた。ケネスもそれに釣られるように、無意識に不敵な微笑を浮かべていた。

（やはり俺はそこ中でしか生きられないのかもしれない……）
痺れる様な感覚を味わいながら、ケネスは心の中でそう呟き苦笑するのだった。

ビーストが空港に墜落する一月前の出来事である。

プロローグ（後書き）

初めての人は初めまして。 毎度私の拙作を読んで下さる方は毎度どうもです。

鉄屋でございます。

第2章の登場人物&プロローグの投稿となります。 このお話はアムラスがビーストの墜落に巻き込まれる前のお話です。 ここに出てくるケネスは閃光のハサウェイに登場したキルケー部隊の司令官です。 軍を退役して日本の九州で暮らしているという設定です。 確か何かの資料で彼が例の組織創設に携わるといふ話を読んだことがあったので、私の想像で書いてみましたがいかがでしょうか？ まあ色々とツツコミどころがあるでしょうが、楽しく読んで頂けたら嬉しいですね。

それと登場人物で、色々気になる人物が紹介されておりますが、これも私の妄想が生み出した設定です。 何ら公式な資料に基づいて書かれているわけではありませんので誤解なさらぬようお願いいたします。 あくまで私の書く物語の中だけの設定とお考え下さいませ（アタリマエダ！）

なにはともあれ、第1章に引き続き、またお付き合い下されば嬉しく思います。

鉄屋でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6580s/>

機動戦士ガンダムBeast 流星のアムラス

2011年5月11日19時25分発行